

---

for a girl

sadaka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

f o r a g i r l

### 【Nコード】

N3250F

### 【作者名】

s a d a k a

### 【あらすじ】

金木犀が甘く香る秋、茜色に染まった教室から聞こえてきたのはアコースティックギターの甘い音色。その音色を奏でていたのは見るからにバンドマンという感じの男の子だった。友達のアミが紹介してくれた彼は有名人らしいんだけど……。

## 第1話

ほこりっぽくなつて資料室を出たら、もう日が暮れかかっていた。時計は持つてないから今が何時なのかは分からないけど、秋になつてから日が暮れるのが早くなつたなあ。七時くらいまで明るかった夏がつい最近のことのようなのに、時間が経つのであつという間だってもう外の空気は冷たくて、金木犀が香つてるくらい秋なんだもん。

窓から差し込んでる西日がものすごく廊下を照らしてるけど、あの太陽が沈んじゃうと途端に真つ暗になるんだよね。先生に頼まれた用事も済ませたし、カギを返して早く帰ろうつと。そう思つて歩き出したら、職員室の方から先生が来るのが見えた。

「和泉、まだやっていたのか」

そんなことを言つて目を丸くしてるのは担任の若槻先生。先生に頼まれたから資料室の掃除してたのに、そんな呆れた顔されると切ない。

「もういいから、帰りなさい。ご苦労だつたね」

「はい。もう帰ります」

先生にカギを渡して、お辞儀をしてから踵を返す。あの言い方から察するに、ちょっと整理しておけば良かっただけみたい。見たいテレビがあつたのに頑張つて掃除して損しちゃった。

高校に入学してから、はや六ヶ月。初めは右も左も分からなかった広い校舎も、今では自分の家みたいな感覚で歩ける。職員室や資料室があるのは二階で、私たち一年生の教室は四階。二階分の階段を上つて四階に着くと、どこからともなく音楽が聞こえてきた。ギターの音、かな？

バラードっぽい歌詞がつきそうなアコースティックギターの音色に耳を澄ませてはいたけど、別に弾いてる人を探そうとは思わなかった。だけどその音色は、どうも私のクラスから聞こえてきてるみ

たい。四階の一番端にある一組の教室は前も後ろも扉が閉まっ  
て、ちよつと入りづらい雰囲気。扉の上の方にある小窓みたい  
なところから中を覗いてみると、やっぱり教室内には生徒の姿  
があった。窓際の席で数人が集まって、何か話してるみたい。

仲間で盛り上がってるみたいだからジャマするのも悪いな  
って思ったけど、鞆が教室にあるから入らないわけにもいか  
ない。仕方がないから、なるべく音を立てないようにドアを  
開けてみた。だけどやっぱり気付かれちゃって、皆いつせいに  
こっちを振り返る。うちのクラスじゃない人ばかりだったけど、  
その中に一人だけ知った顔があった。

「あれ？ まだ残ってたんだ？」

声をかけてきたのは同じクラスの友達、アミ。アミが私の机に  
座ってたから、歩み寄りながら頷いた。

「若槻先生に資料室の掃除を頼まれちゃって」

「あー、そつか。マチ、日直だもんね」

「うん。ごめんね、ジャマして。もう帰るから」

「ジャマなんかじゃないよ。ね？」

全員友達なのか、アミは周りの人たちに同意を求めている。  
扉は閉まってたけどナイショ話してたとかいうわけでもないらしく、  
皆アミに頷いてた。和気藹々って感じだね。

「同じクラスのヤツ？」

机に座って片手にアコギを持つてる男の子がアミに話しかけた。  
さっきの曲、この人が弾いてたんだ。後ろの方の髪だけ立てて、  
見た目からしてバンドマンって感じの人。全員同じ制服着てるの  
に、個性が前面に出てるってすごいなあ。ピアスとか指輪とか、首  
元に見えるネックレスのせいかも。

「和泉真智子。だから、マチ」

アミは私を紹介した後、今度は私にアコギを持つてる彼を紹介  
した。

「知ってると思うけど、アッキー」

私を知ってることが半ば確実に紹介されたけど、ごめん、知らない。でも知らないって言い出せる雰囲気でもなさそうだったから、とりあえず笑って誤魔化しておいた。けどやっぱり、知らなかったことバレちゃったみたい。アミもアッキーも、他の皆も全員驚いた顔してる。

「ウソ！ マチ、アッキー知らなかった？」

地元のライブハウスでけっこう人気のあるバンドのボーカルなんだからアミが教えてくれたけど、聞いたことのないバンド名だった。アミ達は同じ学校に通う人なら誰でもアッキーを知ってると思ってたみたい。確かに目の前にしてみると目立つ人だなあって思うけど、同じ学年にこんな人がいるなんて気がつかなかったなあ。

「アッキー、オーラが足りてないんじゃないの？」

「ダメじゃん、アッキー。もっと頑張らないと」

皆はそう言って笑いあってるけど、アッキーだけ笑ってない。真顔でじつとこっち見てる。き、気まずい。

「あ、私、そろそろ帰るわ。じゃあね、アミ」

アッキーが怒り出しそうだったから急いで鞆を取って、慌ててアミに別れを告げた。何も言っただけで、アッキー怒ってたよね？　なんか、悪いことしちゃったなあ。

居残りで資料室の掃除をさせられた翌日の朝、学校に続く坂道の途中でアミに会った。うちの高校、自由な校風で気楽なのはいいんだけど、立地が良くないんだよね。この心臓破りの坂さえなければ、本当にいい学校なんだけど。

「それでね、マチ」

「えっ？ 何？」

あまりに天気が良かったからアミと一緒にいたこと忘れて、ボーツとしちゃった。私がまったく話を聞いてなかったのが分かったらしく、アミは呆れた顔してる。

「ごめんごめん。何の話だっけ？」

「アッキーの話だよ」

あ、そういえば、忘れてた。昨日、アッキーを怒らせちゃったんだっけ。

「怒ってた？」

「ん？ 誰が？」

「誰がって……アッキーが」

「何で怒るの？」

私が言っている意味が伝わってないみたいで、アミはキョトンとしている。何でって、言われると困るなあ。あの時はアッキーが怒っちゃったかなって思ったけど、アミにそういう反応されると自信なくなる。そうだよな、フツウ、自分のこと知らなかったってだけで怒る人はいないよね。

「やっぱり何でもない」

詳しく説明するのも何だかなあと思ったので、その話は切り上げることにした。でもアミにしたら意味不明なこと言っちゃったよね。「それで、アッキーがどうしたの？」

アミの話が途中だったので、その話題に戻すことにした。アミは不可解そうに眉根を寄せてたけど、思い出したように表情を明るくする。

「そうそう、アッキー、文化祭で歌うことにしたんだよ」

アミ、興奮してる。アッキーが文化祭で歌うのがそんなに嬉しいのかな？

詳しい話を聞いてみると、アッキーはずっと文化祭実行委員に歌ってくれて頼まれてたみたい。だけどバンドの他のメンバーがうちの学校じゃないから、嫌だって断ってたんだって。それがどうい

うわけか、昨日いきなり歌ってもいいってアミたちに言ったらしい。  
「うちの学校の人たちと即席バンド結成するんだって。普段はロックがベースなんだけど、どんな感じになるんだろっ」

ふうん、アッキーはロッカーなんだ。そんなことまで知ってるってことは、アミはライブに行ったりしてるのかな？ それにしてもアミ、よっぽどアッキーの歌が好きなんだね。目がキラキラしてるよ。

「ね、一緒に見に行こう？」

誘われちゃった。音楽は広く浅くだけど、アッキーの歌ってちょっと興味あるかも。昨日のアコギも上手だったし、やっぱり本格的なのかな？

「うん、いいよ。でもその前に、模擬店食べ歩きに付き合ってね？」

「もちろん！ 中学の頃に文化祭見に来たけど、うちの模擬店ってけっこう凝ってるんだよね」

「あ、私も行った。クレープとかケーキとか、美味しかったなあ」

「クレープって三年二組の？」

「そうそう！ 確か三年二組だった！」

「やっぱり！ ケーキは一年五組でしょ？」

「確か、そうだったよ！ すごいね、よく覚えてる」

「っていうか、うちら同じ物に惹かれすぎじゃない？」

あはは、それは言ってる。中学時代って言ったらお互いに顔も知らない頃なのに、こんなに同じ物を食べてたって不思議だなあ。アミとはよく食べ歩きするけど、やっぱり好みが似てるんだね。

その後は食べ物の話ばかりで、教室に着いてからもずっと話してた。文化祭、早くこないかな。

## 第2話

二学期が始まって少し経つと、うちの学校は文化祭の準備で慌しくなる。一般公開されるからなのか、生徒だけじゃなく先生まで熱が入ってる。私は部活にも所属してないし、クラスの手伝いをちよつとして、それほど忙しくもなく準備を終える……はずだった。

「マチ、今日は？」

授業が終わるなり、アミが声をかけてきた。いつもなら鞆をひつたくつて速攻で教室を出るところだけど、今日は少し余裕があるので机を退かしながらのんびり答える。

「一時間なら残れるから、少し手伝ってく」

「じゃあ、クギ打って」

「りょーかい」

アミからの指示を受けて、教室の隅にある掃除用具入れに向かう。文化祭の準備期間だけ、うちのクラスの掃除用具入れには工具箱が置いてあるから。

文化祭が二週間後に迫って、校内はもうお祭りムード一色。今の時期はどこのクラスも放課後を準備の時間にあてている。うちのクラスは出店なしなので、校門に飾るアーチや看板の制作が担当なんだよね。だから準備はそれほど大変じゃないんだけど、私には時間がない。それは学校行事とは無関係な家庭の事情が原因だった。

うちのお父さんのお姉さんの子供（私からすれば従兄弟）のお姉さんが学校の近くで喫茶店を営んでいる、短期間だけアルバイトを頼まれたのがつい先日のこと。普段勤めてるバイトの人が都合悪くなっちゃって、その代わりだから本当に短期なんだけど、それが文化祭準備期間にちょうど当たっちゃったんだよね。だからクラスの手伝いもせずに授業が終わると速攻で帰っていたんだけど、さすがに気が引けて今日は一時間だけ遅刻させてもらうことにしたの。

「あれ？ クギ、ないよ？」

掃除用具入れから工具箱を引つ張り出して開けてみると、クギが一本もなかった。私の声を聞きつけたアミが後ろから覗き込んできて、頷く。

「ホントだ、ないね。じゃあ、生徒会室に行ってもらってきて」「はい」

アミに軽く返事をして、その足で教室を出る。生徒会室は二階だから、階段を下らないと。急げ、急げ。

「おい」

うん？　なんか今、呼ばれた？

素通りした廊下を振り返って見ると、腕組みをしたアッキーがこっちを見てた。でも廊下には他にも生徒がいるから、呼ばれたのが私かどうかは分からない。でもとりあえず、まったく知らない仲でもないから声をかけてみることにした。

「アッキー」

私が指差すと、アッキーは何故かずっこけた。何か変なこと言っただかな？

「その呼び方、ヤメロ」

「アッキー？」

「アッキーって呼ぶな」

「でもアッキー、私、アッキーの名前知らない」

アッキーは頭痛がするといった感じに顔の半分を手で覆ってしまった。その後ため息をついて、自分の後方を親指で指し示す。

「ちよつと、来い」

「えっ、今？」

生徒会室に行かなきゃいけないんだけど……。って、私が言う前にアッキーは背中を向けて歩き出してしまった。仕方ない、着いて行くか。でも、何の用だろう？

私は二階に用があったんだけど、アッキーは階段を上って行ってしまった。一年生の教室は四階にあるから、そこからさらに上に行くとは屋上しかない。特にカギがかかってたりもしないので、アッキ

「は無言のまま屋上に出た。私もアツキーの後を追ったんだけど、やっぱり外は風が冷たいね。」

「アツキー、どうしたの？」

「フェンスのところまで行ってアツキーが足を止めたので、私も立ち止まって声をかけた。アツキーは嫌そうな表情になってから口を開く。」

「だから、そのアツキーってのヤメロ」

「じゃあ、名前教えてよ」

「アクツくん」

「アクツくん」

「アツキー、自分の名前に「君」つけてるよ。言い方がおかしくて思わず吹き出しちゃった。アツキーも自分で変だと思ったのか、照れたように頬をかいてる。ひょうきんな人だなあ。」

「お前、本当にオレのこと知らなかったんだな」

「今度はちよつと残念そうな表情になって、アクツくんが言う。やっぱりミュージシャンを目指してる人って、そういうの気にしたりするのかな。」

「ごめんね、知らなくて」

「……あやまられるとさらに空しくなる」

「どうしろっていうのよ、アクツくん。でも怒ってる感じはしないなあ。あ、それより、用は何なんだろう？ 早く戻らないとアミに怒られちゃう。」

「それで、用は何？」

「お前、普段はどんな音楽聴いてるんだ？」

「へ？」

「それが、用？ 何だかよく分からないけど、アクツくん真剣な表情してる。ここはやっぱり真面目に答えた方がいいのかな？ でも急にそんなこと言われても、出てこないよ。」

「えーっと、色々？」

「色々じゃ分からないだろ。具体的な名前を出せよ」

「そんなこと言われても……急には思いつかないよ」

「じゃあ、ジャンルでいい」

「ジャンル？ J・POPとか？」

アクツくんが頷いたから、普段何を聞いているのか思い出してみた。でもCDを買ったりすることはあんまりなくて、部屋にいる時は流しっぱなしにしてるラジオとかレンタルとかで聞くからジャンルって言われても困るなあ。

「えっと……イロイロ？」

「だから、色々じゃ分からないって言ってるだろ」

アクツくんは呆れた顔になって、大きなため息を吐いた。うーん、さっきから考えてはいるんだけど、やっぱりとっさには出てこないよ。

「分かった、質問を変える。ロックは嫌いか？」

ああ、それなら答えやすい。

「ううん、嫌いじゃないよ？ M・Mとかジョン・スタースとかマーティアとか、邦楽だったらエルズとか黒桜とか好き」

「……詳しいじゃねーか。しかも黒桜とかマニアック」

「あ、ホントだ。名前、出てきた」

こづいうのって、言われると思いつくもんだね。でも何で、こんなこと聞きたかったんだろう？

「じゃあ、エルズのコピーやるから。後夜祭、絶対聞きに来いよ」

それだけ言うと、アクツくん行っちゃった。結局、何が言いたかったんだろ？ よく分からないけど、そろそろ戻らなくちゃ。後夜祭の予定まで出来ちゃったから、文化祭当日のスケジュールはビツシリだなあ。楽しみ、楽しみ。

### 第3話

十月下旬のよく晴れた週末、うちの高校の文化祭はわりと盛大に執り行われた。短期バイトが文化祭当日までだったので土曜日は参加出来なかったんだけど、その分最終日の日曜は存分に祭りを楽しんだ。約束通りアミと模擬店食べ歩きもしたし、体育館で吹奏楽や演劇も見たし、満足満足。ついでに給料までもらっちゃったから、お腹いっぱい胸いっぱいだよ。文化祭当日までは地獄のように忙しかったけど、終わってみればいい思い出だね。

「マチ、そろそろ後夜祭始まるって」

隣のクラスであまったクッキーを分けてもらって食べてたら、アミが教室に駆け込んで来た。そっか、ついに文化祭も終わりなんだね。後夜祭って楽しそうだけど、このお祭りムードが終わるのはちょっと寂しいな。

昼間は一般客も入って賑わってた校舎も、後夜祭の頃には生徒だけになる。でも熱気はまだ続いていて、あちこちで楽しそうな声が上がっていた。それにしても、窓という窓に人だかりができてるなあ。何でだろう？

「皆、アッキーの歌が目当てなんだよ」

私が首を傾げていたからか、アミが説明するように言った。そっか、これからアクツくんが歌うんだ。聞きに来いって言われてたの、すっかり忘れてたよ。

「エルズのコピーバンドだったけ？ 楽しみだね」

「あたしはクラッカージャックの曲の方が良かったんだけど、まあ、文化祭だから仕方ないよね」

「クラッカー？」

「アッキーのバンド。ジュライボックスっていうライブハウスでは知らない人はいないよ」

「ふうん」

なんだか知らない単語が続々と出てきたけど、とにかくアクツくんは有名なんだね？ 自分で曲つくってるんだからコピーバンドじやもつたないって、アミは言いたいのかも。

「で、何で下に向かったの？」

後夜祭の舞台は校舎に取り囲まれた場所にある、中庭。中庭を見るんだったら上からの方がいいと思うんだけど、アミは迷うことなく階段を下ってる。ついに一階に着いちちゃったので疑問を口にしてみると、アミはニヤツと笑った。

「ライブは近くで見なきゃ。特等席、ゲットしてあるんだ」

アミが自信满满だったのも頷けるほど、私達が辿り着いた場所はステージに近かった。すでに中庭は満杯状態だったんだけど、アミの友達が最前列を確保してくれていたみたい。見たことある顔ばかりだなあと思ったら、前にアクツくんが教室でギターを弾いてたとき一緒にいた人達ばかりだった。きっと皆、仲いいんだろうなあ。

フツウのライブ会場とは違って指定席も何もないので、中庭はもみくちゃ状態。そんな中、アクツくんたちがステージに上がってきた。中庭だけじゃなく、上からもすごい歓声が降ってくる。うわあ、すごい人気。アクツくん一人に向けられた歓声じゃないんだろって、有名人には違いがないよね。知らなくて、悪かったかな。

ステージの上のアクツくんは、いつもと変わらない制服姿。でも何か、マイクを握っていると別の人みたい。そんなに親しいわけじゃない私ですらそう思うんだから、アミたちはもつとそう感じてるのかも shouldn't。それもまたアクツくんの魅力、だよな？

マイクに向かって「アー」とか「テス」とか喋りながら、アクツくんは周囲を見回してる。何か気になるのかなと思ってたら、私たちがいる場所で視線を止めた。ああ、皆が見に来てるか探してたのかな？ 私たちに向かってイタズラ小僧みたいな不敵な笑みを浮かべたところを見ると、やっぱりそうみたい。

アクツくんの合図で即席バンドの演奏は始まった。エルズは有名

なミュージシャンだから、皆ノリにのってる。また選曲がいいなあ。アックくん、盛り上げ方わかってるよ。これは人気があるのも当然かも。

楽しかった後夜祭ライブは、だけど三曲で終わっちゃった。まあ、即席バンドだったらそんなものなのかな？ アックくん達の次にステージが上がった人たちには興味がないらしく、アミに出ようと促されたので中庭を後にした。

「アックくん、すごいね」

中庭の熱狂から遠ざかって、会話が聞き取れるようになったのでアミに話しかけてみた。私は良かったなあと思ったんだけど、アミは渋い顔してる。

「アッキーはね、良かったよね。でもギターやベースが音外しすぎ」「えっ、そ、そうだった？」

音、外れてたんだ？ 私、全然そんなの分からなかった。アミって、けっこう音楽にウルサイのかも。なんか意外。

「ね、アッキーのところに行かない？」

「うん、いいよ」

絶対聞きに来てって言ってたから、ちゃんと聞いたよって報告しなきゃ。良かったよっていうのも伝えなきゃね。

「そつえばマチさあ」

「うん？」

「何で『アックくん』なの？」

「アッキーって呼ぶなって言われたから」

「アッキーに？ そんなこと言われたの？」

「え？ うん」

「へえ。何でだろうね？」

たぶん、あんまり親しい間柄じゃないからだと思うけど。でもアミは、そう思っただけじゃないみたい。アッキーってフレンドリーなのねって独り言みたいに零してる。

「あ、アッキー」

前方にアクツくんを発見して、アミは考えるのをやめたみたいだった。アミがさっさとアクツくんの所に行っちゃったので、私も後を追う。

「やっぱりアッキーはクラッカージャックじゃないとダメだよ」  
「そうか？ コピーバンドなんて久々で、けっこう楽しかったけどな」

アミは納得がいかなかったみたいだけど、アクツくんは後夜祭っていう場を楽しんでみたい。うん、ステージで歌ってる時のアクツくん、楽しそうな顔してたもんね。お祭りなんだから楽しいのが一番だよ。って、私は本来のアクツくんを知らないからそう思うのかもかもしれないけど。

アミと話してたから口を出さないでいたんだけど、会話が途切れたところでアクツくんがこっちを向いた。私の顔を見るなり、アクツくんは不敵に笑って見せる。なに、その笑顔。

「オレの歌、良かっただろ？」  
「すごい自信满满で言われたから笑っちゃった。『どうだった？』とは聞かないんだね。でもすごく、良かったよ。」

「なに笑ってんだよ。失礼なヤツだな」  
「ごめんごめん。アクツくん、すごくカッコ良かったよ」  
「お、やっぱり？ そうやって素直に褒められると悪い気はしねーな」

アクツくん、得意顔になってふんぞり返ってる。この人、単純で面白いなあ。でも、カッコ良かったのは本当だよ。

「マチはクラッカージャックを知らないからそんなこと言うんだって」

アミはやっぱり、まだ不満そう。きつと、そうとうアクツくんのバンドが好きなんだろうなあ。アミがそこまでハマるバンドって、どんな感じなんだろう。そんなことを考えてたら、アクツくんのバンドを見に行こうってアミに誘われちゃった。でも私が返事をするより先にアクツくんが口を挟む。

「次のライブはクリスマスあたりだ」

「もちろん行くよ。マチも一緒にね」

まだ返事してないけど、アミの口調からすると行くことになっちゃったみたい。まあクリスマスだからといって特に予定もないし、ライブハウスにも行ってみたいから拒否する理由もないけど。

「お前も来るのか？」

アクツくんが確かめるように聞いてきたから、とりあえず頷いておいた。私の反応を見て、アクツくんはまだ不敵な笑みを浮かべる。「来るのはいいけどオレに惚れるなよ？」

またしても自信満々に言い切って、アクツくんは去って行った。

アミが平然としてるところを見ると決まり文句なんだろうけど、おかしい。堪えられなくて、私は一人で笑ってしまった。

## 第4話

秋の一大イベントだった文化祭も終わって、学園生活はいつもと変わらないものに戻ってしまった。文化祭前後で変わったことといえば、アクツくと少し仲良くなったっていうことくらい。前は友達友達って感じだったけど、今ではフツウの友達くらい感覚で顔を合わせれば話をするようになった。

アクツくんは何と言うか、お調子者だけどロマンチストで、気安いんだけど気難しいところもある。秋風の気持ちよさに誘われて訪れた放課後の屋上でアクツくんを見た時、改めてそんなことを思ったりした。アクツくんは一人、フェンスに背中を預けてギターを手にしてる。だけど弾く気はないみたいで、指は動いてない。

アクツくんはいつも、友達誰かしらと一緒にいる。アミもしょっちゅうアクツくん達と一緒にいるから、私も何となくアクツくん達と過ごす時間が増えた。けどふと、気がつくともアクツくんがいなくなってる時があるんだよね。そんな時は大抵、アミがアクツくんを探しに行く。さっき廊下で会ったときアミが探してたから、今もきつと友達輪から抜け出てきたんだろう。

きつとアクツくんは、誰にも話しかけられなくて人気のない屋上に一人でいるんだろう。そんな風に思ってしまうのは、どうしてだろう。私にも似たようなところがあるからかな。ま、いいや。せつかく屋上に来たんだし、私は私で一人の時間を満喫しよう。

屋上に出た途端にアクツくと目が合っちゃったけど声をかけずに、彼がいるのとは反対側のフェンスの方に移動する。こうすれば屋上の出入り口が衝立になって、お互いに姿が見えない。私の目の前には暮れ行く街並みが広がってる。ああ、やっぱり、キレイだなあ。

「……シカト？」

後ろから声がしたから振り返ると、アクツくんが立ってた。逆光

で顔がよく見えないけど、声に明るさがない。まあ、目が合ったのに素通りすれば、シカトと言えばシカトなのかな。

「うん。シカト」

「そうハツキリ言うなよ。傷ついたらだろ」

「え？ ご、ごめん。今は話しかけられたくないかなーと思っただけで深い意味はなかったんだけど」

私の解釈を聞いてアクツくんが何を思ったのかは分からなかったけど、彼は無言で歩み寄って来た。そのまま、アクツくんは私の横にどかっとな腰を下ろす。それきり話しかけてくるような雰囲気もなかったもので、きつとまたロンリータイムに突入しちゃったんだろう。

あーあ、太陽が沈んじゃった。寒くなってきたし、そろそろ帰ろうかな。さすがに帰りくらいは一言かけようと思って、隣にいるはずのアクツくんを振り返る。そしたらアクツくんもこっちを見たいだった。

「お前さあ、今度の日曜ヒマ？」

「うん？」

急に話を切り出されたので返事になってない返事をしちゃった。アクツくんの真意が分からなかったので、しゃがみこんで視線を合わせてから答える。

「ヒマだけど、何で？」

「遊園地、行かねえ？」

もう太陽が沈んじゃってるので、近くにいってもアクツくんの表情は分からない。でもこれは多分、皆でっつてことでしょう。

「アミたちも行くんでしょ？」

「横田は行く。でも他の女子は抜き」

アミは行くのに、いつも一緒にいるサチやレイナは抜き？ それって、何かおかしくない？

「何で？」

「何でも。それより、行くのか行かないのか決めるよ」

「行く、行くよ」

なんか腑に落ちないけど、アミが行くんだったら行ってもいいよね。そんな軽い気持ちで返事したら、アクツくんはもう用はないとばかりに立ち上がった。別れのアイサツもなしに去って行ったけど、何だったんだろう。

っていうか、集合場所も時間も聞いてない。まあ、どうせ明日も会っただろうからいいか。さてと、本格的に寒くなってきたので私も帰ろう。

## 第5話

空が高い秋晴れの日曜日、私とアミとアクツくとトモくんの四人は駅で待ち合わせをして遊園地に行った。トモくんはいつもアミたちといるメンバーの一人で、学校では現在の人数プラス女子と男子が三、四人ずつくらい。みんな仲がいいんだから都合のつく人全員で来ても良さそうなものだけど、何故か今日はこの四人だけ。アクツくんの誘い方からして怪しかったから、たぶん何かあるんだろうなあ。

何となく身構えていたものの、結局は何もなかった。途中からはそんなこと考えてたのも忘れるほど、久々の遊園地を満喫しちゃった。でもやっぱり何事もなく終わることはなくて、異変は最後にやって来た。

「観覧車、乗ろうぜ」

というアクツくんの提案があつて、私たちはカップルで賑わつて観覧車の列に並んだ。ジェットコースターとか二人席の乗り物はグーパーで相席の人を決めたけど、これは全員で乗るんだよね。私はフツウにそう思つてただけど、いざ順番になったらアクツくんが行動を起こした。

「じゃ、お先」

トモくとアミに言い置いて、アクツくんは私の手を取つて観覧車に乗り込む。常に動きっぱなしの乗り物だから、アミたちが呆然としてる間にロックをかけられてしまった。もう後戻りも出来ないけど、この展開は何？

「は、疲れた」

箱に入るなり、アクツくんは席に座つて足を投げ出した。強引に引つ張られたからちよつと痛い手をさすりながら、私もとりあえず向かいの席に腰を下ろす。

「あ、ごめん。痛かつたか？」

私が手をさすっているのを見てアクツくんが急に申し訳なさそうな顔になった。さつきまでのけ反ったのが前傾姿勢になったので、私の方はちよつと身を引きながら首を振る。

「大丈夫だけど、突然どうしたの？」

「実は今日、オレとお前は付き添いなんだよ」

「……どういうこと？」

私が眉根を寄せるとアクツくんは苦笑いを浮かべた。またシートに背中を預けながらため息ついてる。アクツくんが動く箱、揺れるなあ。

「トモの奴、横田が好きなんだってさ」

「トモくんがアミを？へええ〜」

アミは可愛いしオシャレだし、明るいから誰とでもすぐ仲良くなる。しょつちゆう告白とかされてるみたいだからトモくんが好きになっても不思議じゃないけど、それでも改めて聞かされるとちよつとビックリ。

「何かあるとは思ってたけど、そういうこと」

「そ。今頃は下の箱でトモが告白してんじゃないの？」

私はちよつと面白いと思っちゃったけど、アクツくんは興味ないみたいでグツタリしてる。さつきの「疲れた」って、気疲れてるところか。きつとトモくんに頼まれちゃったんだね。お疲れさま、アクツくん。

今日の真意を明かしたきり、アクツくんは黙ってしまった。観覧車の窓のところに肘を置いて、頬杖つきながら景色を眺めてる。きつとまた、話しかけられたくない時間に入っちゃったんだね。だつたら私も景色を楽しもう。

今日私たちが来た遊園地は山の中にある。それだけでも高いのに、観覧車に乗るとさらに高いところから街並みを見下ろせるんだよね。海と山に挟まれた場所、そこに私たちが住んでる街はある。でも海の遠い果てを見下ろす機会なんてあんまりないから、見慣れた街並みも違つて見えるな。新鮮、新鮮。

「……なあ、何考えてんの？」

不意に、アクツくんが口を開いた。顔を戻してみるとアクツくんもこつちを向いてたので、正面を向いたまま答える。

「キレイじゃない？」

風景を指差しながら言うと、アクツくんが吹き出した。私、笑われるようなこと言ったかな？

「真面目な顔して友達の心配でもしてるのかと思えば、そんなことすっかり忘れてるんだな」

「あ、そっか。忘れてた」

そういえば、私たちの足下ではアミが告白されてるんだっけ。でも相手はトモくんだし、何を心配するんだらう？

「オレ、お前のそーゆーとこけっこう好き。気楽でいい」

アクツくんは軽快に笑ってるけど、ビミヨウなことを言われたような気がする。でもまあ、いつか。深く考えないようにしよう。

「なあ、またアッキーって呼べよ。オレが許す」

「へ？ いいの？」

「アクツくんって言い辛いだろ？」

「……自分でそう呼べって言ったくせに」

「何か言ったか？」

「何も。ありがと、アッキー」

「おう」

アッキーは飾り気のない笑顔を見せてくれたけど、ちょっと顔が赤くなったような気がする。アッキーって呼ばれるの、実は照れくさいのかな？ そのわりには皆にアッキーって呼ばれてるけど。

「これ終わったら帰らうぜ。どっちにしても、もう遊ぶ気分じゃねーだらうからな」

あー、アミとトモくんのことかあ。確かに、あの二人にしてみれば遊ぶ気はなくなっちゃってるかもね。うまくいったなら二人になりたいだらうし、うまくいかなかったら気まずいだらうし。

十五分経って、私とアッキーは先に観覧車を下りた。その一、二

分後にアミとトモくんが下りて来たんだけど、二人とも変わった様子  
子はまったくくない。でもアッキーの提案には二人も賛成みたいで、  
そのまま帰る流れになった。途中でアッキーとトモくんと別れて二  
人になってからもアミは何も言わなかったけど、けっきょくどうな  
ったんだろっ？

## 第6話

ダブルデートみたいな感じで遊園地に行った後もアミとトモくんの関係に変化はなかった。二人とも平気な顔で、今までと同じように友達付き合いをしてる。もしかしてトモくん、言えなかったのかなあ。まあ私は当事者じゃないから、関係ないっちゃ関係ないんだけど。

アミとトモくんの関係みたいに私の日常も変わりなく過ぎ去って行った。二学期の期末テストも終わって、十二月二十三日。今日から冬休みだ。

「ごめんね、マチ。せっかくのクリスマスだっというのに」

学校の近くにある音楽喫茶で、申し訳なさそうな顔をして私に謝っているのはハルちゃん。うちのお父さんのお姉さんの子供で、私の従兄弟のお姉さん。確か三十を過ぎてはるんだけど、見た目は二十代って言われても全然いける。本名は晴美さんっていうんだけど、子供の頃からハルちゃんハルちゃん呼んでたから未だに彼女はハルちゃんなのだ。

ハルちゃんは、今では珍しい音楽喫茶を自分で経営してる。前にもお店を手伝ったことがあるんだけど、また頼まれちゃったんだよ。その頼まれた日がイブとクリスマス当日なので、ハルちゃんはそのことを気にしてるみたい。

「いいよ、気にしないで。どうせ予定もないし」

「予定ないの？ 高校生にもなって寂しいわね」

「余計なお世話だよ。そんなこと言うなら手伝わないよ？」

「あ、ウソうそ。手伝ってくれるよね、マチ？」

私の顔を窺ってるハルちゃん、半笑いだよ。もう半分はすまなさそうにしてるけど、どっちかに統一してほしい。もう、カワイイんだから。

「でもマチがこっちの高校に通ってくれてて助かったわ。おかげで

頼みやすくなっちゃった」

ハルちゃんのお店は私の通う高校に近い市街地にある。私の家は海の方にあるので、市街からはちょっと遠い。昔はめったに来られなかったけど、今は学校帰りにも寄れちゃう距離なんだよね。

「いらっしやいませ」

お客さんが来たのでハルちゃんは応対に行っちゃった。今日は買い物をついでに寄っただけだから、そろそろ帰ろう。明日のバイトに備えて今のうちにゆっくりしとかなきや。

「ハルちゃん、帰るね」

「今日はあたしのオゴリ。明日からよろしくね」

財布を出そうとしてただけけど、ハルちゃんに止められちゃった。やったね。オレンジジュース、ごちそうさま。

ハルちゃんのお店を出て、のんびり駅に向かった。街はもうクリスマスモード一色で、あちこち華やか。この時期って街を歩いているだけでも楽しいよね。つい買い物しすぎちゃうから、バイトさせてくれるハルちゃんに感謝しないと。

そういえば、うちの高校ってクリスマスパーティーがあるんだよね。参加は自由だけど学校主催だから、一応学校行事。アミたちはパーティーに行くのかなあ？ そういえば、クリスマスくらいにアツキーのライブがあるとか言ってたけど、結局どうなったんだろう。とか思ってたなら、駅前でアツキー発見。

「アツキー」

「なんだ、お前か」

素っ気なく振り向いたアツキーは面白い形の黒いコートを着てる。アツキー、黒似合うなあ。私服だと本当にバンドマンだよ。

「何してんの？」

アツキーが紙の束を抱えてたから、気になって訊いてみた。そしてたらアツキーは束から一枚取って、私の前に掲げて見せる。これ、チラシだ。

A3サイズのチラシを受け取って見ると、日時とか場所とかが書

いてあった。横文字の名前がズラツと並んで、見るからにバンド名。あ、アッキーのバンドの名前もある。へー、ライブやるんだ？「来るだろ？ つーか、来い」

「うん、見たい見たい」

と思つたけど、よく見れば十二月二十五日？ ダメだ、行けない。

「何でクリスマスにやるかなあ」

「クリスマスだからやるんだ。パーティーに行く予定なら、そっち蹴ってこつち来い」

パーティーって、学校主催のクリスマスパーティーのことかな？

しかも先約を蹴つて来いって……アッキー、無茶言うなあ。

「パーティーじゃないんだけど、クリスマスは予定があるから無理」

「なんだよ、男か？」

……そんな予定があつたらクリスマスにバイトなんて入れないよ。アッキーだつて一人身のくせに。あ、でも、アッキーにはバンドがあるから私の一人とはちよつと違うんだろうなあ。なんか切なくなつてきた。

「そのチラシ、配るんでしょ？ ライブに行けないから手伝うよ」

「お、マジで？ じゃあ半分、よろしくな」

嬉しそうなアッキーにドサツと、チラシを渡された。気軽に手伝うなんて言つちやつたけど百枚くらいありそうだな。配りきれるか心配。

「全部さばけよ。じゃあ、後でな」

私の考えを見透かしたようにしつかりとクギを刺して、アッキーはどっか行つちやつた。散らばつて配った方が効率はいいけど、一人でやるのは心細いなあ。とりあえず、駅から出てきた人に渡してみようかな。

「おねがいします」

出来るだけ愛想よくチラシを差し出してみたんだけど、素通りされちゃつた。うう、チラシ配りつて大変。アッキー、努力してるんだなあ。

「いないじゃん！」

「えー！ さっきまでここにいたのに！」

なんか、騒いでる女の子がいる。誰か探してるみたいだけど、芸能人でもいたのかな？ いやあ、それはないか。こんな田舎にこないでしょ。それはさておき、早くチラシを配らないと。

「おねがいします」

うう、また素通りされちゃった。悲しいなあ。

あ、さっきの女の子達がこっち来る。どうしよう、渡してみようかな。

「おねがいします」

ちょうど私の前を通ったからチラシを差し出してみると、彼女達は興味なさそうに一瞥くれた。また素通りされちゃうかなと思ったんだけど、一人が足を止めてくれてチラシに見入ってる。やった、初めて受け取ってもらえた！

「ちょっとこれ、ジュライボックスのクリスマスイベントのチラシだよ」

「えっ！ マジ！？」

チラシを受け取ってくれた女の子が他の子にも声をかけてくれて、私、女の子達に取り囲まれちゃった。一人一枚受け取ってくれたから、四枚配れた！ この調子で頑張ろう。

「やっぱさあ、アッキーいたんじゃないの？」

「このチラシ配ってたんじゃない？」

「アッキー？」

女の子達の話題にアッキーが出てきたから、別の場所に行こうとしてたのに振り返っちゃった。私がアッキーの名前を出したからか、彼女達は驚いたように目を丸くしてる。

「ジュライボックスのチラシ配ってるのにアッキー知らないの？」

あ、そっちの驚きなだね。私の言い方が悪かったみたい。

「アッキーなら、さっきまでここにいましたよ。今はどっかでチラシ配りしてると思いますけど」

「えっ、アンタ、アツキーの知り合い？」

「アツキーに協力して、このチラシ配ってるんです」

「なんだあ、それならそうと早く言いなよ」

私を同類だと思ってくれたみたいで、女の子達は親しげな笑みを向けてくれた。しかもチラシ配りを手伝ってくれるって。やったあ、ラツキー。

アツキーファンらしき女の子達のおかげで百枚くらいあったチラシは全部配り終えた。でも、もう七時回ってるよ。アツキーに報告してから帰りたいけど、探してる時間はなさそう。とりあえず協力してくれた女の子達にお礼を言っつて、結局アツキーには会わないまま電車に乗っちゃった。ケータイの番号もメアドも知らないから、しよーがないよね。まあ、休みが終わればまた学校で会えるからいいか。それまでアツキーも私も今日のことを覚えてればの話だけど。

## 第7話

クリスマスバイトも無事に終わって、新年がやってきた。初詣は混んでるだろうから行く気もなく、おせち食べてお餅食べてミルクン食べて、とにかく家でダラダラしてたら三日になってアミから電話がきた。初詣に行こう、だって。そろそろ空いてるだろうからって言うてたけど、考えてることは同じだなあ。

「マチー、こっちこっち」

市街にある、この辺では有名な神社に行くと、すぐにアミの声があった。普段に比べれば人出は多いけど、待ち合わせが出来ないほど混んではない。だからアミの姿もすぐに見つけられたんだけど……あ、アッキー達もいる。

「あけましておめでとう」

アミたちとは初だけど毎年恒例のアイサツをして、それから境内に行くことになった。アミと会うのも久々だったから、並んで喋りながら歩く。

「クリスマスライブ、どうだった？」

「サイコーだったよ。アッキーがバラードとか歌ったりして」

「へえ、アッキーがバラード」

ロッカーなアッキーがバラード……うーん、ロッカーなアッキーすらあんまり知らない私には想像がつかないなあ。でもアッキーがバラードって、なんか意外。あ、でも、初めてアッキーのギター聞いた時はバラードっぽい曲調だったよね。あの時の曲、だったのかなあ。

「お前ら、本人がいる前で堂々とオレの話するなよ」

前を歩いていたアッキーが呆れた顔して振り返った。嫌そうな表情つくってるけど、なんか嬉しそう。きつとアミにベタ褒めされて照れちゃったんだ。アッキー、カワイイなあ。

「そこ！ 含みのある笑い方すんな！」

あはは、新年早々アッキーに怒られちゃった。でも笑わずにはいられないよ。アッキーたちと一緒にいると和むなあ。

ちよつとだけ並んでお参りして、その後はカラオケにでも行くこうって話になった。別にカラオケが嫌なわけじゃなかったんだけど、私はパス。皆と別れて違う場所に行くことにした。クリスマスに会ったばかりだけど、せつかく市街に来たんだからハルちゃんにも新年のアイサツしないかね。

「おい」

皆と別れてから少し歩いたところで、アッキーに呼び止められた。何だろう？ 何か用事でも思い出したのかな？

「どうしたの、アッキー？」

「用事、すぐ終わるのかよ？」

「うん？」

どういう意味だろう。まあ、アイサツだけで済ませばすぐに終わる用事だけど、ハルちゃんに引き止められたら長くなるかもね。何とも言えない感じだけど、早く終わったらカラオケに来てって言うたいのかな？ オレの歌を聞け、とか？

「わかんないけど……何で？」

「すぐ終わるんだつたらアクアに来て。場所、分かるか？」

「アクア？ 何それ？」

「……分かった。一時間で抜けてくるからお前も一時間で切り上げる。駅前で待ち合わせな」

「え、ちよつと、アッキー？」

自分の言いたいことだけ言って、行っちゃったよ。何だったんだろう。まあ、一時間もあれば十分な用事だし、いいか。

ハルちゃんに新年のアイサツを済ませて、ちよつとお店でまったりさせてもらってから、アッキーとの待ち合わせ場所に行くことにした。アッキーと別れてから一時間半くらい経っちゃったけど、大丈夫かな。アッキーって待たされるの嫌いそうだし、もういないかも。そしたら、アミにでもメールして聞けばいいよね。どうせ一緒

にいるんだろっから。と、思ってたんだけど、アッキーはちゃんと待ってくれてた。どんな格好しててもアッキーのツンツン頭は目印になるから便利だね。

「ごめんね、待った？」

「待った」

うつ、身もフタもない。アッキー、不機嫌そうな顔してるよ。でも急に待ち合わせなんて言い出したの、アッキーの方なんだからね。「あれ？ 他の皆は？」

皆で一緒にアクアってところに行くのかと思ってたんだけど、アッキーしかない。アッキーは一言、「あいつらは抜き」とだけ言った。何でだろう？

「ほら、行くぞ」

カラオケがある方を振り返ってるうちにアッキーはさっさと歩き出した。駅に向かっている。駅前で待ち合わせって言ってたからこの辺にあるお店か何かだと思ってたんだけど、電車で移動するみたい。アッキーと電車に乗って、辿り着いたのは一駅隣だった。そこからさらに歩いて、十五分くらいしたところで「AQUA」って看板が目についた。雰囲気からすると、喫茶店とレストランの中間くらいのお店。通いなれた場所なのか、アッキーは自然な感じで店内に入って行った。

「好きなもん頼めよ」

って、アッキーは言うけど、言われなくても好きなもん頼むよ。何にしようかな。かわいいメニューがいっぱいで迷っちゃっ。

「うーん、じゃあ、ダーズリン・ティー」

パフェとか頼もうかかって思ったけど、意外と値段が高かった。お年玉もらったばかりだから余裕はあるんだけど、服とか欲しいから節約しなきゃ。

「せっかく奢ってやるって言ってるのに、それだけでいいのか？」

「えっ、オゴリなの？ じゃあ、トロピカルサンデーも追加」

「……現金なヤツ」

呆れたように言って、アッキーは水を口にした。注文を済ませたのでウエイトレスが去って行く。私としてはラッキーだけど、何で急におごってくれる気になったんだろう？

「アッキー、どうしたの？」

「何が？」

「だって、おごってくれるなんて言い出すから」

「ああ、クリスマスの礼だ。遅くなっちゃったけど、ありがとな」

ありがとなって……私、アッキーにお礼言われるようなことしたっけ？ しかもクリスマスでしょ？ クリスマスと言えばバイトでアッキーのライブにも行かなかったのに。って、ああ、あれのことかあ。

「あれ、私が一人でやったんじゃないの。だからおごってくれなくてもいいよ」

百枚くらいあったチラシを全部配り終えたのは、協力してくれた女の子達のおかげだもん。それなのに私だけアッキーにおごってもらうのも悪いよね。そう思ったから事情を説明したんだけど、アッキーはもう知ってたみたいであっけらかんとしてる。

「あいつら常連なんだよ。だからライブが終わった後にその話、聞いた。でも、お前のおかげには違いないから」

「えー、悪いよ」

「うっさい。黙っておごられとけ」

オレがおごるなんて滅多にないんだぞって、アッキーは言う。そっか、だから皆は一緒じゃないんだ。とてもじゃないけど全員におごってられる人数じゃないもんね。

「あ、思い出した。お前、ケータイの番号くらい教えとけよな」

ふと、アッキーが嫌そうな表情になって私を見た。いったい何を思い出したらそういう話になるんだろう。それに、アッキーに番号聞かれるのなんてこれが初めてだよ。

「礼しようと思っても連絡先が分からないし、横田とかに聞くのも変だろ？ 仕方ないから学校の名簿で調べて、久々に家電なんか

かけちゃった。そしたらお前、家に帰ってないとか言われるしさ」

「家の電話……に、かけたの？」

「おう。お前の母ちゃんと話すの、すっげー恥ずかしかった」

うん、それは確かに嫌かもね。私が逆の立場だったらすぐく電話かけづらいよ。それでも家電にかけてくれたアッキーの律儀さに、胸中で拍手を送っておこう。でもお母さん、そんなこと一言も言っ  
てなかったけどなあ。忘れっぽいのは家系だから、きっとキレイに  
忘れ去られてたんだね。

「ごめんね、クリスマスと次の日は家にいなかったから」

クリスマスはハルちゃんの家泊めてもらって、その翌日は大掃除を手伝ったもんだから帰るのが遅くなっちゃったんだよね。アッキーが電話してくれたの、きっとその時だったんだ。

「泊まり……」

何が気になったのか、アッキーは眉根を寄せてボソツと呟いた。それからまじまじと、私の顔を見てくる。どうしたんだろう、アッキー。

アッキーが何を考えてるのか訊こうかなとも思ったんだけど、パフェが運ばれてきたもんだから意識がそっちに行っちゃった。わーい、美味しそう。オゴリだと思うとまた、格別だよな。

## 第8話

「何これ？」

進級を間近に控えた春休み、定期を買いに来たついでに寄ったハルちゃんのお店でチケットを二枚渡された。無言でテーブルの上に置かれたもんだから顔を上げて尋ねると、ハルちゃんは残念そうな表情をしている。どうしたんだろう。

「行こうと思って買ったんだけど、どうしても外せない用事が重なっちゃったのよね。もつたいないからマチにあげる。友達とでも行ってきなよ」

ふーん、それは残念だったね。でも、もらった私としてはラッキー。まだちゃんと見てないけど、誰のライブだろう。

「えっ、ハルちゃん、これ……」

往年のロックスター、ジャン・ジョエルの日本公演。しかもプラチナチケットだから一枚二万円。ひええ、二枚で四万円だよ。こんなのもらっちゃっていいのかな。

「マチの世代だと知らない人の方が多いかもしれないけど、マチは好きでしょ？」

「うん。でも、本当にいいの？」

「いいの。クリスマス潰しちゃったお詫び」

そんな、ちゃんと給料ももらったのに。ハルちゃんてば太っ腹だなあ。プラチナチケットもらったからってわけじゃないけど、大好きだよ。

でも、誰と行こう。私はハルちゃんの影響で古い人もわりと知ってるけど、ジャン・ジョエル好きな人っているかな？ この人、確かもう六十過ぎてるんだよね。よっぽど好きな人じゃないと誘えないよ。

家に帰ってから、とりあえずアミにメールしてみた。アミってけっこう音楽にうるさいみたいだから、知ってるかなと思って。でも

返ってきた答えは「誰それ？」だった。うーん、アミでも知らないかあ。アミが知らないんだったらサチやレイナが知ってるはずもないし、他に誰かいたっけ？

あ、そうだ。いるじゃない、ロックに詳しくそうな人。前にアクアに行った時にケータイの番号教えてもらったし、さっそく電話してみよう。

『もしもし？』

あ、出た。でも、声がなんか訝しそうなのは何故？

『もしもし？ 和泉真知子だけど』

『誰？』

「……マチ。誰って、アッキーひどいなあ」

『ああ、なんだ、お前か』

この素っ気ない反応。番号聞くだけ聞いといて、きつと登録もしてなかったんだ。なんか誘いたくなくなってきたぞ。

『で、何？』

「……再来週の日曜ってヒマ？」

『無理。オレは多忙なんだよ』

「あ、そ……」

考える間もなく無理って言われた。アッキーもダメなら、どうしよう。一人で行ってもいいんだけど、そうするとムダになるチケット代がもつたいなさすぎるよね。アッキーならロックに詳しくそうな知り合いがいそうだし、聞くだけ聞いてみようかな。

「ねえ、アッキーの知り合いにジャンニジョエル好きな人っていない？」

『ジャンニジョエル？ お前、えらく古い名前持ち出すなあ』

あ、やっぱりアッキーは知ってるんだ。好きなのかって聞かれたから、好きって即答しといた。でもそれ、質問の答えになってないから。

『何だ？ レコード聴きたいとか、そういうやつか？』

そうそう、まだレコードの時代の人なんだよね。オレが貸してや

るうかつて言ってるから、アッキー持ってるんだ。さすがロツカーだね。でも、そういう話じゃないってば。

「再来週の日曜に日本公演があるでしょ？ 確か、二十年ぶりくらいなの」

『お前、詳しいな。まさか、行くのか？』

「チケット、もらったの。でもジャンニジョエル知ってる人が周りにいなくて、アッキーの知り合いならいるかなーと思って」

『……行く』

「へ？」

『何で他のヤツにやらなきゃいけないんだよ。オレが行くに決まってるんだろ』

「え、だって、さつき無理って……」

『細かいことは気にすんな。で、席はどのへんだ？』

「えっとね、S席の真ん中らへん」

『プラチナチケットじゃねーか！ よくそんなの手に入ったな！ アッキー、めちゃくちゃ喜んでる。もしかして、チケット取ろうとして取れなかったのかな。だったら初めから素直に行くって言えばいいのに。って、私の誘い方が悪かったのかな？』

『お前と知り合いでマジ良かった。ぜってー遅刻すんじゃないぞ』  
う、なんかビミョウなこと言われて電話切られた。アッキーが喜んでくれるのは嬉しいけど、それってチケットがなかったら私に価値がないって言われてるみたいだよ。まあ、たぶんアッキーに他意はないんだと思うけど。

ま、いつか。どうせならジャンニジョエルを好きな人と行った方が盛り上がるもんね。再来週の日曜、待ち遠しいなあ。

短い春休みが終わって、新学期が始まった。それと同時に進級して、私たちは高校二年生になった。クラス替えがあっただけで、アミとは今年も同じクラス。アッキーやトモくんは隣のクラスみたい。教室も四階から三階になって、新しい日々の始まりだね。

新学期が始まってからというものの、アッキーは毎日上機嫌だった。一日中、ずーっとニヤニヤしてる。その原因を知ってるのは、たぶん私だけ。私の顔を見るたび楽しみを思い出すのか、今までにないくらいアッキーに笑顔を向けられるのが変な感じ。笑っちゃいそうになるのを堪えるので必死だよ。

電話した翌日、アッキーにすっかりとクギを刺された。ジャン「ジョエルのプラチナチケットを狙ってるヤツは多いから、ライブが終わるまでチケット持つてること誰にも言うなだって。アミでさえ知らなかったんだから、そんな心配しなくて大丈夫なのに。カワイイなあ、アッキー。」

「最近、すごく機嫌いいよね」

嬉しさを全然隠せていないアッキーは、今日もアミに突っ込まれてる。そんなことねーよとか言っただけで、嫌そうな表情を作ってみても楽しそうに見えるよ。他の皆もアミと同じことを思ってたみたいで、全員に「何か隠してるだろ」って言われてる。あはは、アッキーの負けだね。

「ねー、マチは何か知らない？」

どんなに突っ込まれてもアッキーが口を割らなかつたもんだから、帰り道でアミがそんなことを聞いてきた。うーん、私的には言ってもいいと思うんだけどアッキーに口止めされてるからなあ。今は黙っておこう。ごめんね、アミ。

「彼女でもできちゃったのかな」

アミがポツリと、寂しそうに呟いたもんだからビックリしちゃった。私が驚いたからか、アミは慌てて首を振る。

「あっ、違っつて。そういうことじゃなくて」

「えっ、うん」

とりあえず頷いてみたけど、そんなに慌てて否定しなくても。たぶんアミは、私が何を思ったのか分かつちゃったんだろう。でも、それってやっぱり……。

「そういえばさ、春の新作スイーツが出たじゃない？ 今度の日曜にでも食べ歩きに行かない？」

アミ、取り繕うように話題を逸らした。でもごめん、日曜は約束があるんだよね。このまま黙ってて、本当にいいのかな？

「そっかあ。じゃあ、その次の日曜は？」

「うん、それなら大丈夫」

「じゃあ、決まり。約束だよ？」

そんな他愛のない会話をしながら帰ったけど、やっぱりちよっと気がかりだな。ライブが終わったら、アミにはちゃんと話そう。

## 第9話

春らしい暖かな陽気の日曜日、私とアッキーはちよつと早めの時間に待ち合わせをして、夕食を済ませてから会場に行くことにした。ファミレスで食事を済ませてから外に出ると昼間の陽気がウソみたいに肌寒い。こんなこともあるのかと上着を持ってきたけど、アッキーはシャツ一枚。寒くないのかな？

「アッキー、寒くない？」

「会場に行けば熱気でアツくなるだろ？ 関係ねーよ」

アッキーはケロツとした顔でそんなことを言っただけ。確かに、それは言えてるかも。さすがだね、アッキー。

会場周辺に着くと、もう人が集まってきた。やっぱり、私たちと同じ年代の人はあんまりいないなあ。中高年ばかりだから、私たち浮いてるかも。

「ほら、さっさと行くぞ」

アッキーはもうジャンニジョエルのことしか頭にないみたいで、さっさと歩き去って行く。チケット持つてるの私だから、一人で先に行っても入れないよ？

「早くしろって」

私のがんびり歩いているのが気に食わなかったのか、アッキーはちよつと苛立つちゃったみたい。指定席なんだから、そんなに急かさなくても大丈夫なのに。でも怒らせると嫌だから、気持ち早足で歩こう。

「あー、もう！ 遅い！」

怒鳴られたかと思っただら手をひったくられた。アッキーは私を引っ張りながら、どんどん先に進んで行く。アッキーの手、熱い。まだ会場の中にも入ってないのに、もう興奮してるんだ。よつぽど好きなんだね、ジャンニジョエル。

会場入りしてから三十分くらい待たされて、ジャンニジョエルの

ライブは始まった。もう六十歳過ぎてるっていうのに最初からとばして、満場総立ち。私たちはステージの中央が目前にあるいい席にいたんだけど、ジャン・ジョエルの方があんまりそこにいなかった。隅から隅までお客さんを楽しませるみたいに広いステージを走り回ってる。パワフルだなあ。

最後はバラードの名曲を熱唱して、ライブは終わった。アンコールはなくて、時間にしてみれば二時間くらい。最後のバラード、あんまりにも近くで聞きすぎて泣きそうになっちゃった。やっぱりすごいね、ジャン・ジョエル。今日のステージ、見れて良かったよ。ライブ中はほとんど座ることのなかったSランクの席に座ると、ふと視線を感じた。顔を上げてみるとアッキーがじっと、こっち見てる。やばい、もしかして本当に泣いてたのかな？ もしそうだったら恥ずかしいから一度顔を背けて目元を拭って、それからアッキーを振り返った。

「そろそろ行くところか？」  
「……まだ、いいだろ」

アッキーはそう言って、自分も席に腰を下ろす。確かに、今外に出ようとしたらすぐく混んでるもんね。もう少し、会場に残ってる熱気に浸ってしよう。

「すごいよな、ジャン・ジョエル。あの歳であんなに走り回って。歌唱力も若い頃のまんまだったぜ」

黙ってたアッキーが急に話し出したから振り向いたんだけど、アッキーはこっち見てなかった。口元に優しい微笑みを浮かべてるけど、目は遠くを見てる。もう幕が下りたステージを、見てるのかな。「ロック魂、見せ付けてくれるぜ。オレもジャン・ジョエルみたいになんか歌ってほしいな」

いつか、絶対に同じ場所に立つ。アッキーは静かに、そう言った。「アッキーなら出来るよ」

「とーぜんだ。夢で終わらせる気はねえ」

あ、いつものアッキーに戻った。そうそう、アッキーは自信満々

じゃなきや。頑張れ、アツキー。

「オレもいつか、お前を泣かせるくらいのバラードを作る。楽しみにしてるよ?」

う、やっぱり泣いてるの見られてたんだ。そんな意地悪く茶化さなくてもいいのに。人は感動したら泣くものなんだよ!

「さて、そろそろ行こうぜ。いつまでもここにいたら離れられなくなる」

軽快に笑って、アツキーは席を立った。確かに、いつまでもステージの前にいると終わつたはずのライブから抜け出せなくなつちやうね。余韻は残しておきたいけど、そろそろ現実に戻らなきや。

「お前、家どこなんだよ?」

「え、何で?」

「送ってくから。素直に教える」

いきなりそんなこと言われたから、ビックリしちゃつた。ライブの余韻に浸つてるせいかな、アツキーが優しい。でもさすがに、それは悪いよね。

「いいよ、一人で帰れるから」

「断んなよ。素直に教えろって言っただろ」

「でも……」

「でも、じゃねえ。もうちょっとライブの話したいんだよ」

あ、なるほど。それなら納得。じゃあ、お言葉に甘えて送つてもらつちやおつかいな。

アツキーは本当に家まで送ってくれて、私たちは飽きることもなくライブやジャン・ジョエルの話をしながら帰路を辿つた。やつぱりアツキー、古い音楽にも詳しいなあ。

## 第10話

ライブが終わってからもアッキーの上機嫌な日々は続いていた。やっぱり、そうとうジャン・ジョエルが好きだったんだね。パワフルなステージに触発されたのか曲作りも順調らしくて、忙しく動き回ってる。きつとまた、ライブやるんだね。

アッキーが学校外で精力的に動いてるから、自然といつものメンバーで集まる機会も減っちゃった。アッキーってムードメーカーというか、中心的な人なんだよね。だからアッキーがいないと、自然散会みたいな感じになる。私が少し寂しいって思ってる以上に、アミは退屈してるみたいだった。

「あーあ、最近アッキー忙しそうだよね」

目の前のケーキを食べるでもなくフォークでつつきながら、アミがため息をつく。やっぱり、アッキーの存在って大きいんだなあ。アミにとっては特に、なのかな？

「ライブの準備してるんでしょ？ 大変そうだよね」

「まあねー。曲作ったりライブの準備してるアッキーっていいんだけどさあ、うちらとしてはやっぱり寂しいじゃん？」

うーん、まあ、ねえ。私たちにとっては友達のアッキーっていうのが大きいけど、ライブを見に来る人たちにとってはクラッカー・ジャックのアッキーだもんね。同じアッキーなのに、違う。なんか、不思議。

「ねえねえ、今度のライブは行くでしょ？」

「うん。突然バイト頼まれたりとかしなければ、行きたい」

「バイト、断ればいいのに」

「そうもいかないよ」

ハルちゃんには色々とお世話になってるから頼まれたら協力したい。まあ私がバイトを優先させようと思うのは給料をもらえるからってという理由も大きいんだけど。食べ歩きをすることも洋服を買

うにしても、お小遣いだけじゃ全然足りないよ。

あ、バイトと言えば、アミにジャン・ジョエルのライブに行っただって話しなきゃ。私の思い過ごしならいいんだけど、そうじゃなかったらヤキモキしてるはずだもんね。

「今更かもしれないけど、アッキーの機嫌が良かった理由、教えようか？」

「え？ 何？」

私が唐突に話を切り出したからか、アミはポカンとしてる。この反応は……どっちだろう。よく分かんないけど、話を始めちゃったからには話しておこうかな。

「アミ、ジャン・ジョエルって知ってる？」

「知らないけど……そういえば、前にもそんなこと言ってたね」

「ジャン・ジョエルってすごく昔のロックスターなんだけど、その人が二十年ぶりくらいに日本公演やったの。この間の日曜日に」

「この間の日曜って……予定があるとか言ってた日？」

「そうそう。アッキーはその人のライブを楽しみにしてたから機嫌が良かったんだよ」

そう教えるとアミは複雑な表情になっちゃった。訝しそうな目をしてるけど、何か聞きたいのかな？

「一緒に行ったの？」

「うん。チケットももらったからアミを誘おうかなって思ってたんだけど、ジャン・ジョエル知らなかったでしょ？ だからアッキーに声かけたの」

「あのメール、そういう意味だったんだ？ でも、何で黙ってたの？」

「みんな知りたがってたみたいだから言いたかったんだけど、口止めされちゃって。プラチナチケットだったから、誰かに取られるのを心配してたみたい」

ジャン・ジョエルなんて、今の若い人は知らない人の方が多いのね。でもそんな心配しちゃうほど、アッキーはジャン・ジョエル

のライブに行きたかったんだ。そう説明したらアミは呆れたような顔をした。彼女ができたわけじゃないから大丈夫だよって言おうかと思っただけど、さすがにその科白は胸中で留めておいた。

「ジャンニジョエルって、いつの時代の人？」

「もう六十過ぎてるはずだから、一番売れてたのは二十年か三十年くらい前じゃないかな。興味ある？」

「うん、聞きたい」

「私は持ってないけどアッキーがレコード持つてるって言ってたから、貸してって言えば貸してくれるんじゃない？」

「レコード……」

呟いて、アミは苦笑いを浮かべた。そっか、レコードだけ借りても蓄音機がなきゃ聞けないんだ。うーん、これは盲点。

「あ、そうだ、アッキーなら弾き語り出来るんじゃない？」

「あ、それいい。今度頼んでみようか？」

「うんうん。私も聞きたい」  
「でも、どっちにしろライブ終わってからだよー。今は忙しそうだし」

残っていたケーキを平らげて、アミはまた憂鬱そうな顔に戻っちゃった。アッキーにかまってもらえないのがさうとう寂しいんだなあ。やっぱりアミって……いやいや、邪推するのは良くないよね。

喫茶店やレストランをハシゴして春のスイーツを食べ歩いたからもうおなかいっぱい。アミもそろそろ胸焼けしてきたって言うてたから、帰ることにした。そしたら駅前で、噂の主発見。

「アッキー」

「げっ」

顔を合わせるなり「ゲッ」って何よ。失礼しちゃうなあ、もう。

「なんだ、お前らか。見付かったのかと思って焦っただろ」

「見付かるって、誰に？」

「うるさい。あっち行け」

邪険に手を振って、アッキーは私たちには見向きもしない。何か

から逃げてるみたいに周囲を見回してる。何なんだろう？

「あ、いたいた！」

「アッキー発見！」

駅の方から黄色い声が上がって、女の子達がこっちに向かって走って来た。アッキーはもう一回「げっ」って言って、脱兎のごとく走り去って行く。アッキーがいなくなった私たちの目の前を、女の子の集団が同じくらいの速度で駆け抜けて行った。アッキー、追われてたんだ。

「……忙しそうだね、アッキー」

「最近、人気出てきたからねえ」

クリスマスライブの後から急にファンが増えたんだって、アミが愚痴みたいに零す。アッキーも行っちゃったところで、私たちも駅で解散した。

## 第11話

アッキーがずっと忙しそうにしてるからあんまり皆で集まることもない日々が続いて、梅雨に入った。今日も雨。昨日も雨。一昨日も雨。その前の日も雨。別に雨が嫌いなわけじゃないんだけど、こ  
う雨の日が続くとお日さまが恋しくなってくるよね。

今年も担任の若槻先生に頼まれごととして居残った放課後、ふと屋  
上に出てみようかなって気になった。校舎の窓からすでに雨模様が見えてるんだけど、何となく。雨が続けているからしばらく屋上にも  
行つてないなあと思つて。まあ、行つたからって何があるわけでも  
ないんだけど。

そんなかるーい気持ちで屋上に出たら、アッキーとバツタリ会っ  
ちゃつた。屋上の扉の横つちよの、屋根があつて濡れないところに  
座り込んで。声かけようかなと思つたけど、アッキーの表情が冴  
えないものだったからやめた。こういう雰囲気を醸し出してる時は  
ロンリータイムなんだよね？

すぐ傍にいるけどアッキーの存在は消し去つて屋上から見る風景  
に意識を向ける。どんよりと重い雲が垂れ込めていて、小雨がシト  
シト降つてるなあ。空気は湿気が多い。もうすぐ夏つて感じだね。

「またシカトかよ」

あ、アッキーが話しかけてきた。つてことは、ロンリータイム終  
了なんだね？ でもアッキー、まだ冴えない顔してる。何かあつた  
のかな？

「お前つてさ、空気みたいなヤツだよな」

そんな、苦笑いしながらビミョウなこと言われても。アッキー何  
か変だけど、とりあえず会話に応じてみよう。

「私、そんなに存在薄い？」

「そついう意味じゃなくて……なんつーか、変」

……「なんつーか」の意味が分からないよ。ハッキリ「変」とか

言ってくれてるじゃん。しかも私の顔見て、アッキーは笑った。

「変って言うより不思議って感じか。一人になりたい時に誰かが傍にいるってイヤなんだけど、お前だったら気にならない。何でだろうな？」

ああ、なるほど、それで「空気みたい」なのね。でもそれ、存在感がないっていうのと何が違うの？ 違いは分からないけど、何でアッキーがそう感じるのかは何となく分かるよ。

「それはね、私もアッキーをシカトしてるからだよ。たぶん」「無視すんな！」

いきなり怒鳴られたからビックリして後ずさっちゃった。だってアッキー、真面目な顔のまま言うんだもん。

「あ？ 悪い。怒鳴るつもりなんてなかったんだけど」「独り言みたいに言っつて、眉根を寄せたアッキーは中空を見てる。

首も傾げてるけど、そうしたいのは私の方だって。ビックリしたあ。

「あ、あのね、アッキー……」

「そんな怯えた声出すなよ。悪かったって言っつてんだろ」

「ああ、うん。それはもういいんだけど」

「……いいのかよ」

「え？ ダメなの？」

自分でも何が何だか分からない発言をしちゃったもんだからアッキーも黙り込んでしまった。でもすぐ、アッキーは顔を背けて吹き出す。良かった、機嫌直ったみたい。

「ああ、もういいよ。で、何言いかけたんだ？」

「あ、うん。さっきの話なんだけど、一人になりたい時って誰にでもあるじゃない？ なんとなくアッキーがそういう感じの時って分かるから、それなら無理に話しかけなくてもいいなあと思って」

シカトとか無視って言うって聞こえが悪いけど、別に険悪な仲だからそうしてるわけじゃないし。分かっつてもらえたかなあと思ってアッキーの顔を覗き込んだら、笑ってた。良かった、ちゃんと通じたみたい。でも少し困ったような表情になっつてるのは何故？

「分かった分かった。空気読んでる、ってことだな」

そんな大層なこと考えてたわけじゃないけど、ま、いつか。アッキーがそう解釈したんだったら、そういうことにしておこう。

「たまに屋上で会うけど、お前は何しに来てるんだ？」

そうやって質問されると答えに困るなあ。特に何かをしに来てるってわけじゃないし、何となくブラブラしてるとしか言い様がない。目的っていうものがあるんだとしたら、それはたぶんアッキーと同じだとは思っけど。

「このくらいの時間帯だと誰もいないから、かな？ 私も一人になりたかったのかもしれないね」

「……それで、オレの存在を簡単に消し去っちゃまってわけだな？」

「あー、そうかもね」

「よく、分かった」

真面目な口調で言って、アッキーはすつと立ち上がった。あれ、なんか、また怒ってる？ 真顔のまま見据えられるとちょっと怖いよ。

「つまり、お前にはオレの努力がちつとも伝わってなかったってことだな」

努力って……何の話？ しかも伝わってなかったってどういうこと？ アッキーは私に何かを伝えようとしたの？ それって何？

疑問が多すぎて理解が追いつかないよー。

「お前、まだオレのライブ見たことないだろ？ 次はぜってー来い」

「え、うん。急な予定が入らなければ行くつもりだけど」

「急な予定が入っても来い。来なかったらシメる」

「ええっ？ 何で？」

「何でもだ。分かったな？」

念を押して、さらに私を睨んでからアッキーは屋上を去って行った。去り際に「ぜってー泣かしてやる」とか言ってたけど、何で？

一体どうしちゃったのよ、アッキーー。

## 第12話

ジュライボックスでクラッカージャックがライブをやる日、幸いにもハルちゃんからバイトに入ってくれとは言われなかった。アッキーに脅されたこともあつて初めてライブハウスつて所に来たけど、けっこう狭いんだね。そんでもつて、お客さんがいっぱいいるからギューギュー。

「はい、マチ」

一緒に来てたアミがどこからか飲み物を持ってきてくれた。チケツトがワンドリンク制だから、この一杯はタダなんだつて。知らないことだらけだなあ。

「今日は前の方には行けそうもないね。マチも初めてだし、後ろの方でまつたり見ようか？」

「うん。そうしてくれるとありがたい、かな」

ステージの近くはもうお客さんで埋め尽くされていて、すごい熱気。しかも女の子ばかり。あの中に割り込んで行くのは勇気がいるなあ。

「人、多いね。アマチュアバンドばかりだから、もっと空いてるのかと思つた」

「ほとんどがクラッカージャックのファンだよ。ほら、赤いスカーフを腕に巻いてる子が多いでしょ？ あれ、アッキーのカラーなんだよ」

「へえ〜。ということは、皆アッキーファン？」

想像してた以上に、アッキーつてすごいんだなあ。あ、よく見れば前にチラシ配りを手伝つてくれた子たちが前列にいる。ああやつて、アッキーを待つてるんだ。

アミと話をしたら急に照明が落とされた。客席が暗くなって、ステージだけスポットライトに照らされてる。そこへ、アッキーが一番乗り。途端に女の子達の悲鳴みたいな声が上がつた。す、すこ

い人気。

演奏はアッキーの雄叫びでスタートした。聞いたことのない、でもノリのいい曲が一番手。お客さんはみんなこの曲を知ってるみたいで、最初からノリにのってる。去年の文化祭でコピーバンドを見た時にも思ってたけど、アッキーってお客さんに乗せるのがうまいなあ。キラキラ、輝いてるよ。

ノリのいい曲が何曲が続いて、それから曲調が一変した。あ、このメロディ。前にアッキーが学校で弾いてた曲だ。そっか、完成したんだね。ノリのいい曲の時は弾けてたお客さんも、バラードの時は静かに聞き入ってる。感情を込めて歌ってるアッキーの表情がすごく切なくて、みんなその雰囲気呑み込まれちゃってるみたい。アッキー、そんな表情もするんだね。学校では絶対に見せない顔だからドキドキするよ。女の子たちのため息が聞こえてきそう。

聞き入ってるうちに、曲が終わっちゃった。アッキーたちの出演もそれで終わりみたいで、ステージの袖にはけていく。アッキーがいなくなると同時にアミが腕を引いてきた。

「行くう」

まだ次のバンドがいるみたいだったけど、アミはさっさとライブハウスを後にする。でも他のお客さんは誰も出て来ないなあ。次のバンドも人気あるのかな？

「アッキー、自分の出番じゃなくてもちよくちよく友情出演するから。皆それ期待して、最後まで帰らないんだよ」

私が後ろばかり気にしてたからか、アミがそう教えてくれた。へえ、そうなんだ。やるなあ、アッキー。でもアミは見て行かなくていいのかな？

「うちらは裏から楽屋訪問。出待ちファンに封鎖される前に行つとかないと、アッキーに会えないよ」

へ、へえ。なるほど、それはすごそうだね。アミってば、ほんと常連さんなんだ。

「で、どうだった？ クラッカージャック」

「うん……」

アミの質問に、なんとも煮え切らない返事をしちゃった。知らない曲ばかりだったけどすぐに溶け込めるメロディで、聞きやすかった。ノリのいい曲は楽しかったし、バラードは胸が苦しくなったよ。でもなんか、アッキーが遠い人になっちゃったみたいで寂しい前にも同じこと思ったけど、その時よりもずっと自分の気持ちに現実味があった。

「こんばんは」

通いなれた様子で、アミが裏口のドアを開ける。そこはすぐ控え室になってたみたいで、ステージ衣装のままのアッキー達がいた。

「お、いらつしやい」

「あれ？ 差し入れは？」

「あ、忘れてた」

アミ、アッキーの他のメンバーとも親しいみたい。関係者みたいに楽しそうに話してる。私は……どうしよう。アッキーにでも声かけてみようかな。そう思って視線を泳がせたら、アッキーとばっちり目が合っちゃった。アッキーが椅子に座ったまま手招きするから、恐る恐る傍に行く。

「来たな」

うっ、アッキー真顔のままだよ。話するのはあの雨の日以来なんだけど、まだ怒ってるのかな？

「マナー、あたし差し入れ買ってくる」

あ、アミがギターの人と外に行こうとしてる。それなら私も、と思っただけど、アッキーに引き止められた。

「お前はこっち来い。話がある」

うっ、やっぱりアッキー真顔のままだよ。ステージ衣装でいつもと印象まで違うから知らない人みたい。ああ、置いてかないで、アミ。

心の中の叫びも空しく、私はアッキーと二人で別の部屋に行くことになっちゃった。楽屋には外へ続く扉の他に二つドアがあって、

アッキーはそのドアの中に入って行く。うっ、怖いよ。わざわざ二人きりになって、また怒られるのかなあ？

後ろ手にドアを閉めてから改めて室内を見ると、何か、変な部屋だった。縦長の狭苦しい部屋の中には楽器やら衣装やらが置いてあって、いかにも荷物置き場って感じ。こんな場所で、一体何を話すっていの？

「ちゃんと見てたか？」

アッキーが口を開いただけで、体が自然と逃げ出しちゃった。拳動不審な私を見てアッキーは眉をひそめてる。

「何だよ？ 別に何もしゃしねーから、変に警戒すんな」

あ、いや、そういうことじゃなくて……。ああ、もう、早く話を済ませちゃえばいいんだ。とりあえず、アッキーの質問に答えておこう。

「見てたよ。アッキー、別人みたいだった」

「それって褒め言葉か？」

「そっだよ。とーぜんでしょ？」

「まあ、とーぜんだな」

褒め言葉を素直に受け取って、アッキーはニヤツって笑った。あ、いつものアッキースマイル。なんか、ちょっと安心。

「でも、泣いてなかっただろ？」

「そんなカントンに泣かないよ」

「まだジャン〓ジョエルには及ばないか。ま、それもいいだろ」

アッキー、なんかスッキリした顔してるけどジャン〓ジョエルと張り合おうと思ってたの？ あ、だから「泣かせてやる」だったのかな？ なあんだ、そっか。それなら全然怖くないじゃん。

「一度ステージに立ってるオレを見たら、もう忘れられないだろ？」

「えっ？ うん、そっだね」

「……重みのない科白、アリガトウ」

「あ、そんなつもりじゃ……」

軽い気持ちで頷いたわけでもなかったんだけど、確かに口調は軽

かったなあ。もう、アッキーが急に話を振るから対応が追いつかないよ。アッキーも諦めたのか、深いため息をついた。

「まったく、お前の反応にはいちいちへこまされるぜ」

「えっ、何で？」

「何で、じゃねーだろ。ちつとは名前が売れてきたかと思えばまったく知らないって言われるし、傍にいても完全に無視されるくらい軽い存在だしよ。これじゃ何のために文化祭で歌ったのかわかんない。そこまで言いかけて、アッキーはハツとしたように口をつぐんだ。文化祭って、去年の？　そこで何で私が出てくるの？」

「……お前、オレが何を口走ったのかまったく分かってねーだろ？」  
「……そんな恨めしげな目で見られても。分からないよお。私があわわわしていると、アッキーはまた深いため息をついた。

「ここまでバラしちまったら全部言う。じゃねーとオレがスッキリしない」

アッキーがスッキリしないんだ？　それも何か、変な話だね。

「文化祭でエルズを歌ったのも、今日のライブに来いって言ったのも、お前がまったく興味を示さなかったから意地になってただよ。初対面でお前にまったく知らないって言われた時、こいつにだけはぜってー認めさせてやるって誓ったから」

「ち、誓っちゃったんだ？　ということは、やっぱり知らなかったことさうとう気にしてただね。ごめんね、アッキー。ウソでもいから知ってる振りすれば良かったかな？　でも、それはそれで失礼だよな。」

「今日のライブ、泣くまではいなくても、ちつとは心動かされたか？」

「それは、もう。カッコ良かったよ、アッキー。学校で见せる顔と全然違うんだね」

「まあ、な。じゃあ、くだらねー意地も今日でおしまいだ」

「照れくさそうに頬をかいてるアッキーは私たちの知ってるアッキーだ。きつと今、私とアッキーは本当の友達になれたんだよね？」

そう思うと何か嬉しいなあ。

「で、お前、来週の日曜はヒマかよ？」

「え？ うん。何で？」

「ずいぶん経つちまつたけど、プラチナチケットの礼、させるよ。顔が売れてきちまつたからこの辺りじゃまずいけど、どっか遠くなら二人で出かけても大丈夫だろ」

アッキー……相変わらず律儀だなあ。ライブに行ったのなんて、もう二ヶ月くらい前の話だよ？

「アッキー、マチー、何してんの？」

私の背後でドアを叩く音がして、その後アミの声も聞こえてきた。私の横を過ぎて行ったアッキーが、行きたい場所考えとけって言い置いてから扉を開ける。うーん、どうしようかな。

### 第13話

アッキーに考えとけって言われてからどうしようかと思ってたんだけど、私が出した結論は「遊園地に行きたい」だった。前にアミとトモくんと四人で行ったことがあるから知ってるんだけど、アッキーって絶叫系もホラーも大丈夫なんだよね。私はどっちも好きんだけどこの二つは好き嫌があるから、両方好きって人は珍しい。だからアッキーが一緒なら、遊園地が二度おいしいんだよね。ということで、私たちはまたいつかの遊園地に行った。今度は二人でだったけど、待ち時間が苦にならないくらい楽しい。

「次、もう一回ジェットコースター乗ろうぜ」

アッキーがはしゃぎながら、ジェットコースターを指差してる。

もう五回目くらいだけど、私も全然余裕。むしろ、まだまだいける！

三十分くらい待ってジェットコースターに乗ってから、今度はオバケ屋敷に行くことにした。この遊園地のオバケ屋敷、凝ったつくりで有名なんだよね。前回来た時はトモくんがダメだったから入れなかったんだけど、すごく楽しみ。

校舎の形をしてるオバケ屋敷の廊下を、並んで歩く。オバケ屋敷全体が塀とかで囲まれてるから、内部は懐中電灯がないと進めないくらい暗い。うん、本格的。どんなシカケがあるのか、楽しみだなあ。

「……楽しそうだな」

私より少し先を歩いてるアッキーが呆れ顔で振り返る。だって、楽しいもん。

「アッキーだって楽しそうだよ？」

「まあな。好きなんだよ、こーゆーの」

うんうん。アッキー、遊園地とか縁日とか好きそっだもんね。お祭り男って感じ。

一時間くらいかけて回るオバケ屋敷は本当に楽しくて、私とアッ

キーは常に笑いつばなしだった。ふつうは恐怖を求めて入るもんなんだろうけど、私たちの場合はビックリすることが笑いに変わっちゃうんだよね。笑いながら出てきた私たちを見て、遊園地の係りの人が訝しそうな顔してた。怖がってなくてごめんなさい。

「さーて、次がラストか？」

そろそろ日が傾いてきたから、アッキーがそう言った。そうだね、時間的にもそんな感じだよ。最後は何がいいかなあ。

遊園地の外れにあるオバケ屋敷から中央の方に向かって歩いてたんだけど、観覧車が目に飛び込んできた。私が足を止めたからアッキーも立ち止まって、同じものを見上げてる。たぶん、考えてることも同じだと思う。

「いつとくか？」

苦笑いしながらアッキーが振り返った。あ、やっぱり同じこと考えてたんだ。私とアッキーで乗ったところでムーディーな雰囲気にはならないだろうけど、それもいいかもね。

今度は一時間くらい列に並んで、私たちは観覧車に乗った。少しずつ、ゆっくりと、地上が遠ざかって行く。やっぱりこの乗り物、揺れるなあ。

「今日はすげー楽しかった」

これが最後だからなのか、アッキーが気の早いことを言い出した。うん、私もすごく楽しかったよ。また誘ったら、アッキー遊んでくれるかなあ？

「何だよ？ 何か言いたいなら言っとけ。聞くだけ聞いてやるから」  
エラそう！ でもアッキー、ちょっと照れてる。そんな顔されたら憎めないじゃん。

「また誘ったら一緒に来てくれるかなって思ってただけ」

「おう、誘ってみる。ヒマだったら付き合ってやる」

またエラそうなこと言ってるけど、半笑いだよ。きっとアッキーの周りにも絶叫系とオバヤ屋敷の両方が好きな人っていないんだね。よしよし、私が付き合っただけだよ。

「そういえばさ、トモくんって結局アミに告白しなかったの？」

夕暮れの観覧車に揺られてると前に来た時のこと思い出しちゃって、アッキーにそれとなく聞いてみた。そしたらアッキーは驚いたように目を丸くしてる。

「お前、横田から何も聞いてないのか？」

「え、うん」

「それにしたって……気付くだろ、フツウ。あんだだけ一緒にいたんだから」

「ってことは、やっぱり告白はしたの？」

「した。で、フラれた」

「あ、そ、そう……」

何か、悪いこと聞いちゃったかな。ごめんね、トモくん。

「あんだだけごちなかつたのに、本当にまったく気付かなかったのか？」

「うん……」

「……そうとうな鈍感だな、おい」

「うっ……」

アッキーに呆れたため息をつかれちゃった。あの二人、そんなにごちなかつたっけ？ 遊園地に行った後も全然フツウに見えただよ……。

それきり何となく会話が途切れちゃって、無言のまま観覧車を降りた。アミとトモくんの話、しない方が良かったかな。アッキー、黙ったままだけど何考えてるんだろう。

「……その上目遣い、ヤメロ」

突然、アッキーが口を開いた。でも上目遣いって……そんなつもりで見てたわけじゃないんだけど。

「アッキーの方が背が高いんだから仕方ないじゃん」

「に、しても、もうちょっと見方ってもんがあるだろーが」

アッキー、なんか恥ずかしそうだけど何で？ バンドマンのくせに見られるのが嫌なのかな？

「アゴを引くな。顔上げる」

またイチャモンつける。それなら、顔を上げて見ればいいのね？  
言われた通り、立ち止まって顔を上げて、アッキーを見た。アッキーの背後には夏の夕暮れが広がっていて、キレイ。ああ、この時期のこの時間帯って気持ちいいなあ。この遊園地は山の中にあるから、余計に空気がいい。

アッキーがいることも忘れて思わず目を閉じたら唇に何か柔らかいものが触れた。えっ、今の、何？

ビククリして目を開けたら、アッキーも何故かビククリしてた。

何でアッキーまでビククリしてるの？ 今、何が起こったの？

「っ、バカ！！ 目閉じんなー！！」

お、怒られた。えーっと、どうしよう。とりあえず、何か言った方がいいかな？

「あの、今……」

「事故だ、事故！ キレイさっぱり忘れろ！」

そう言っただけアッキーはそっぽ向いちゃったけど、私はどうしたらいいんだろう。せめて何が起きたのか説明してよ。

「帰るぞー！！」

怒ったまんま、アッキーは一人で歩き出した。これは、何が起きたのか説明してくれそうもないなあ。しょうがない、アッキーの言う通りキレイさっぱり忘れるか。

アッキーと二人で出かけた遊園地で起こったハプニングを、私の方は言われた通りなかったことにした。でも言いたしっぺのアッキーはなかったことに出来なかったらしくて、あの日から徹底的に避

けられてる。私の顔を見るなり逃げ出すんだもん、それはないですよ。

「マチ、アッキーと何かあったの？」

アッキーがあんまりにも私を避けるから、アミにそんなこと聞かれちゃったよ。でも何もなかったことになってるんだから、何もないうって言うしかない。

「何もないよー」

「そのわりには、アッキーに避けられてるみたいだけど」

「そんなの、私の方が聞きたいって」

もしかして……って思わないこともないけど、実際に何が起きたのか私は知らない。それに「もしかして」ってことをアッキーがする理由が分からない。どっちにしる「何で？」だよ。

「あ、そうそう。この前、マチが言ってたジャン＝ジョエルの曲、アッキーが聞かせてくれたよ。その時にマチのこと避けてない？って聞いてみたんだけど、避けてなんかねーよって怒られちゃった」  
でも絶対、避けてるよね？　って、アミが言う。うう、ジャン＝ジョエルの弾き語りやったんだ。聞きたかったなあ。

「あ、噂をすれば」

不意に、アミが廊下の先を指した。そこにはアッキーと、トモくんやいつものメンバーの姿がある。皆で楽しそうに話してたのに、アッキーは私の顔を見るなり口元を引きつらせた。

「じゃ、オレ、用事があるから」

皆に別れを告げて、アッキーは脱兎のごとき勢いで走り去って行く。全然「なかったこと」になってないじゃん！　ひどいよ、アッキー。私が何したっていうの。

「絶対逃げてる、よね？」

アミが呆れながら呟いた一言に皆が頷いてる。私は渴いた笑みを浮かべることしか出来なかった。

## 第14話

アッキーに避けられ続けたまま、ついに夏休みに突入してしまっ  
た。ケータイの番号は知ってるけど出てくれなさそうだし、次に顔  
を合わせるのは休み明けかなあ。夏休みが終わっても、このままの  
状態が続いたらやだな。せつかく、友達になれたと思ったのに。

「どうしたの、マチ？　せつかくの休みだっていうのに浮かない顔  
しちゃって」

アイステイーを運んでくれたハルちゃんが眉根を寄せながら  
尋ねてきた。休みだっていうのにもなく、最近は何日  
のようにハルちゃんのお店に通ってる。この辺をウロついてればアッ  
キーに会えるかなって思いも、ちょっとだけあって。

「ハルちゃん」

他にお客さんもいなかったから、情けない声を出してみた。ハル  
ちゃんは私の前の空席に座って、話を聞く体勢に入ってくれる。聞  
いてよ、ハルちゃん。

なかったことにしたのを少しだけ忘れることにして、私は溜まり  
に溜まった不満をハルちゃんにぶつけた。忘れたことにはしたけど、  
考えれば考えるほど理不尽じゃない？　何もしてないのに、何でア  
ッキーに避けられなきゃいけないの？

ハルちゃんは真面目に話を聞いてくれていたけど、途中からため  
息が多くなった。それで、話を聞き終えたところで一言、

「若いうちにしか経験出来ない悩みねえ」

って、昔を懐かしむような目で言った。ハルちゃん、こっちは切  
実なんだってば。

「うーん、ねえ、マチ」

「何？」

「マチは、どうしたいの？」

「どう……って？」

「仲直りしたいとか、もう口もききたくないとか、何かしらあるでしょ?」

「前と同じ感じに戻りたい」

「だったら、それを伝えればいいんじゃない? マチを避けるのは、その男の子の勝手。マチが言いたいこと言うのもマチの勝手でしょう?」

そっか、アッキーが勝手なことしてるんだつたら私も勝手にすればいいんだ。ハルちゃん、いいこと言うなあ。さすが大人だね。よし、そうと決まればこれからお宅訪問だ。家に住所録があるから、調べればアッキーの家なんて一発で分かる……はず。

「ありがとう、ハルちゃん」

ハルちゃんにお礼を言つて、それから家に電話をかけた。お母さんに調べてもらったアッキーの住所をメモつて、いざ出発。ふーん、アッキーの家はアクアがある隣駅の辺りなんだ。じゃあライブ帰りに送ってもらった時は反対方向だったんだね。悪いことしたかな。電車に乗って隣駅まで行って、駅前の交番でメモった住所を見せて大体の方角を覚えてもらった。バスに乗った方が確実って言われたけど、徒歩二十分だったら歩いて行けるよね。節約のためにも、歩いて行こう。

駅前にはお店が並んでるけど、少し離れると一気に住宅街になる。ふーん、私の住んでる辺りとはまたちよっと違った雰囲気だなあ。初めての道って新鮮で、楽しいかも。

風景を眺めながら歩いてたら、二十分なんてあつという間だった。この辺りのはずなんだけどなあ。アクツって表札は……あ、あつた。ここがアッキーの家かあ。

アッキーの家はフツウの一戸建て住宅だった。うちの高校はお金持ちの人が通うようなところじゃないから、皆の家も大体一戸建てかマンションだね。さて、どうしよう。呼び鈴を鳴らしてもいいけど、まずは電話をかけてみよう。

コール四回、留守番電話につながっちゃった。もう一回かけなお

してみたけど、やっぱり留守番電話。しょっちゅう出歩いてるみたいだから家にいないのかも。でもせっかくここまで来たんだから、ちゃんと留守なのを確かめてから帰りたいよね。

インターホンを鳴らすとすぐ、家の中から反応が返ってきた。男の人の声だ。でも、アッキーの声じゃない。

「どちらさん？」

玄関から顔を出したのは、私たちより年上っぽい男の人。お父さんではなさそうだし、アッキーのお兄さんかな？訝しがってる様子もなく気軽に話しかけてくれたから、私も話しやすい。

「アッキー……じゃなかった、アキトくんいますか？」

アクツアキトって、何て言いにくい名前なの。アッキーが「アッキーって呼べ」って言うてるのも分かる気がする。

「ああ、『アッキー』ね」

私がいっつの調子で呼んじやったから、お兄さんらしき人は小さく吹き出した。でもすぐにアッキーを呼んでくれる様子もなく、観察するような目で私を見る。

「ところで、君はこのどなたさん？」

「あ、すみません。私、アキトくんと同じ高校の和泉真知子っていうです」

「ふうん、高校生かあ。イズミマチコちゃんね。ちょっと待ってて」  
そう言い置いて、お兄さんらしき人は玄関を閉めちゃった。しばらく待ってただけで、音沙汰なし。あ、あれ？

これって、もしかして帰ってことかな？でも待っててって言われたし、もうちょっと待ってみよう。そう思ったんだけど、それから十分くらい経っても誰も出てこなかった。

……どうしよう。もしかしてアッキー、私と会ったの嫌だって言ってるのかな。でもそれなら、さっきのお兄さんらしき人が教えてくれても良さそうだよな。ってことは、やっぱり何か事情があるんだ。待ってるって言われたのに勝手に帰るのも失礼だし、もうちょっと待ってみよう。

.....。

.....。

.....どうしようどうしようって思ってるうちに、一時間も経っちゃった。これはさすがに、帰れってことだね。アッキー.....そんなに私と会いたくないんだ。

ものすごく落ち込んで、家に帰った。アミに話を聞いてもらおう気力もなかったから、本当にシヨックだったんだろなあ。なんて、他人事みたいに見えるけどシヨックだったよ。あんな風に拒否されるなんて、思ってもみなかったから。

夕飯も食べずに部屋で寝転がってたら、七時くらいに電話が鳴った。誰だろう？ あ、アッキーだ。.....どうしよう、出たくない。ぐずぐずしてるうちに電話、切れちゃった。やっぱり、何か事情があったのかな。でも今電話に出たら、アッキーのこと責めちゃいそう。そんなの嫌だよ。

あ、今度はメール。差出人は.....アッキーだ。家の前に.....いる！？ 今！？

出て来るまで待つてる。家にいないなら電話しろって書いてあったから、思わず家を飛び出しちゃった。そしたらアッキー、本当にいたよ。私が出て来たのを見るなり、アッキーは頭を下げた。

「ごめん」

えっと.....これは、何の「ごめん」なんだろう？ でも、家の前でこれはちよつと恥ずかしいな。

「あの、アッキー？ とりあえず、歩かない？」

促しながら歩き出すとアッキーは素直についてきてくれた。とりあえず歩き出しちゃったけど、どこ行こう。夏だし、浜辺の方にも行こうかな。

「兄貴から、お前が一時間くらい家の前で待ってたって聞かされて

ほんと、ごめん」

しばらく歩いた後、アツキーはそう言って話を切り出した。あの  
人、やっぱりお兄さんだったんだ。でも何で、あんなことしたんだ  
らう。

「最近、フアンのヤツが家まで押しかけてきたりすんだよ。それを  
ウザがった兄貴がああやって……」

なるほど、ああやって追い返してるわけね。いい人そうに見せて  
おいて腹黒かも、アツキーのお兄さん。ちゃんと同じ高校だって言  
ったんだけどなあ。私もフアンの一人だって思われちゃったのかな  
話してるうちに、浜辺に着いた。夜の浜辺ではあちこちで花火の  
音が聞こえる。夏だね。海風が気持ちいいよ。

「それで、わざわざ家まで来たってことは、やっぱりあのことか？」  
言い辛そうにしながら、アツキーが本題を切り出した。そうだ、  
忘れるとこだった。私、話をするためにアツキーの家まで行っただ  
じゃない。

「アツキーのバカ」

「は？ えっ、いきなり何……」

「あんな風に避けられたら傷つくよ」

「……そうだよな。悪い、どんな顔していいか分からなかったんだ」  
いきなりバカって言ったから驚いてたみたいだったけど、今度は  
しゅんとしちゃった。反省してるのかな？ でも、嫌われたわけじ  
やなくて良かった。

「ねえ、アツキー。あれは事故だって言ってたよね？」

あれって、実際は何が起こったのか知らないんだけど。でもアツ  
キーがキレイさっぱり忘れろって言うから、私はフツウの顔してた  
のに。言い出したアツキーもそうしてくれなきゃ、困るよ。

「私、気にしないよ？ だからアツキーも気にしないでよ」

「……少しは気にしろよ」

「え？ 何？」

「いや、オレが悪かった。もう避けたりしないから許してくれるか

？ つーか、許せ」

あ、アッキー節復活。そうそう、逃げ回るなんてアッキーらしくないよ。アッキーはエラそうなくらい堂々としてなきゃ。でも、あれだけへこまされたんだからタダで許してあげるのももったいないよね。

「許してあげてもいいけど、お願い聞いてくれる？」

「……なんだよ。無理なことだったら聞かねーぞ」

月明かりに照らされて、アッキーの嫌そうな顔が見える。でもその表情は「お願い」の内容を伝えると仕方がなさそうなものに変わった。

## 第15話

「おじやましませーす」

夏休みのとある日、私はアッキーの家の玄関をくぐった。今度はアッキーも一緒だから、追いつ返されることもなく堂々と。

「おう。まあ、テキトーにくつろいでくれ」

まだ部屋にも通されてないのに、アッキーは面倒そうな表情になりながら言う。アッキーに連れられて二階に上がろうとしたら、あのお兄さんに会っちゃった。

「あれ？ 君は確か……」

って言ったきり、私を指差したまま止まってる。名前も記憶にないんだ。面と向かうといい人そうに見えるんだけど、やっぱりちょっと怖いかも。

「そいつとは話さなくていいから。行くぞ」

この間のことを怒ってるのか、アッキーの言い方は身もフタもない。でも私まで同じ態度でいるわけにはいかないから、お兄さんに会っただけしてアッキーの後に続いた。

アッキーの部屋は、いかにもアッキーの部屋って感じだった。想像通りって言うのかな、ギターが置いてあって、ミュージシャンのポスターが貼ってあって、CDやレコードが山積みになってる。物は多いけど、整頓されてるから散らかってる感じはしない。それに、何だかいい匂いがするなあ。

「あんま、ジロジロ見んなよ」

アッキーに嫌そうな顔されちゃったけど、見たいよ。あ、M・MのCD。黒桜のポスターもある。ジャン・ジョエルのレコードも目につく所に置いてあるなあ。しょっちゅう聞いているのかな？

「あ、アクセサリーがいっぱい」

ガラスのケースに入れられて、シルバーの指輪がズラッと並んでいる。ドクロとか羽根とか、デザインも色々。見るだけで飽きない

なあ。

「いいから、座ってる。始めるぞ」

部屋の中をうろつろしてたらアッキーに座らされた。私はベッドに腰かけさせてもらったんだけど、アッキーは床に座ってる。アグラーをかいて、手にはアコースティックギター。私のリクエスト通り、ジャン・ジョエルの曲が始まった。ライブでも最後に演奏してた、あのバラード。

やっぱりアッキーは上手いなあ。そうとう弾きこんでるみたい。そうそう、こんな柔らかなメロディに乗せてジャン・ジョエルの甘い歌声が響くんだよな。ライブの感動、思い出しちゃう。

「あれ？ 歌ってくれないの？」

アッキーの声を聞くことなく演奏が終わっちゃったから、尋ねてみた。アッキーは脇にギターを置いて小さく首を振る。

「お前の前じゃ歌えない」

「何で？」

「ライブ、一緒に行っただろ？ オレが歌っても、ジャン・ジョエルと同じ感動は味あわせてやれないから」

ふうん、そんなもんなんだ？ 私にはよく分からないけど、アッキーにはこだわりがあるんだね。でもアッキーの歌、聞いたかったなあ。あ、そうだ、ジャン・ジョエルはダメでもオリジナルならいいんじゃない？

「あの曲、歌つてよ。この前のライブで最後にやった曲」

曲名知らないからこういう風に言うしかないけど、伝わったかな？ あ、伝わってはいるみたい。アッキー、嫌そうな顔してるよ。

「嫌だ。こっばずかしい」

やっぱりね。アッキーのケチ！ ボーカリストがそんなこと言うてどうするのよ。

「あ、分かった。聞きたければライブに来てって言いたいんでしょ？」

「お、おう。そうだ、ライブに來い。ステージでなら聞かせてやる」

笑ってるけどアッキー、なんか照れくさそう。別に照れることじゃないと思うけどなあ。この前のライブではあんなに気持ち良さそうに歌ってたのに。

「そういえば、ラストの曲を歌ってる時のアッキー、セクシーだったよ。あんまり切なそうな表情するからうつとりしちゃった」

「なっ、バカなことやってんじゃねえ！」

本当のこと言っただけなのに怒られた。っていうか、照れたんだね。顔が真っ赤だよ、アッキー。

「見んな、バカ」

あ、またバカって言う。不機嫌そうな表情になってそっぽ向いたけど、アッキーはすぐに大きなため息をついた。

「お前さあ、あんまりそーゆーこと言うなよ」

「何で？」

「簡単に褒められても嬉しくねえ！」

あ、なるほど。そうだよな、いつもいつも褒められてばかりじゃ聞き飽きるよね。今度からは控えめに言おう。

「……外、出ようぜ。頭おかしくなってくる」

もう一度深いため息をついて、アッキーは立ち上がった。私としてはもうちょっとギターを聴きたかったけど、アッキーがそう言うなら。

アッキーの家を出た後、アクアで食事をしてから帰ることになった。早めの夕飯だったから店を出たのは六時くらいだったんだけど、アッキーが送ってくれるって言うから甘えちゃった。逃げ回ったこと、まだ気にしてるのかな？ アッキー、優しいよ。

「送ってくれてありがとう」

家の前に着いたからお礼を言うと、アッキーはうちを見上げて眉をひそめてた。何か気になるのかな？

「お前の家、共働き？」

「え？ 何で？」

「電気、ついてねーから」

ああ、それを気にしてたんだ。でもうち、共働きじゃないよ。

「今日は両親とも結婚式に行ってるんだ。せつかくだから、ちょっと上がってく？」

「いや、無理」

「何で？ 誰もいないから気楽だよ？」

「余計無理だつっの。ってゆーか、何でその状況で誘うかな」

「うん？ アッキー、何て言ったの？」

「誘うなって言ったんだよ！ 次そんなこと言ったら容赦しねーからな！」

アッキー、怒って帰っちゃった。せつかく仲直りできたと思ったのに、もう誘うとか言われちゃったし。うーん、気難しいなあ。

## 第16話

アッキーと仲直りして、夏休みが明けて、平穏な二学期はあっという間に一ヶ月が過ぎ去った。十月に入ると、うちの学校は文化祭の準備で慌しくなる。校舎全体を覆うような、独特の熱気。また、この季節が来たんだね。ってことは、アッキーたちと知り合ってから一年も経ったんだ。色々なことがあったせいか、時間が経つのであつという間だった。入学したのがつい最近のことのようなのに、あと一年半で卒業かあ。

「またこの時期が来たね」

同じことを考えてたみたいで、あちこちで文化祭の話題が飛び交ってる廊下を歩きながらアミがそう言った。祭りの後はちょっと物悲しい気分になるけど、やっぱり早く来てほしいよね。うちの文化祭、楽しいから。

「そういえば、アッキーは今年も歌うの？」

去年は私へのあてつけのために即席バンドまで結成して歌ってた。でもクラッカージャックのメンバーが同じ学校じゃないから、文化祭ではオリジナル曲が歌えないみたいなんだよね。コピーバンドでも楽しかったって言ってたけど、今年はどうだろう。

「頼まれてはいるみたいだけど、アッキーがどうするのかは知らない」

アミもそんなこと言ってるくらいだから、やっぱり歌う気はないのかな？ ステージに立つんだったら、きっと皆には言うはずだもんね。アッキー、目立つの好きそうだから。

「そういえば、マチは？ 今年もバイト、やるの？」

アミに訊かれて、思い出した。そっか、去年みたいにバイト頼まれることもあるかもしれないだ。急だと予定も立たなくなっちゃうし、前もってハルちゃんに確認しておいた方が良さそうだね。今年もアミと模擬店食べ歩きする予定だし。

もうちよつと学校で喋っていくというアミと別れて、一人で帰ることにした。まあ、帰るって言ってもハルちゃんのお店に寄り道しただけだ。気持ちのいい秋晴れだから、金木犀の香りを楽しみながらのんびり歩こうかな。暑くも寒くもなくて、この時期は本当に気持ちいいよね。

あ、下駄箱でアッキー発見。体勢からすると誰かを待ってるみたいだけど、ヒマそうにしてるから声かけちゃえ。

「アッキー」

「おう」

返事はしてくれただけど不機嫌そう。またロンリータイムなのかな？ だったら長居するのも悪いよね。

「じゃ」

「ちよ、待て！」

手を振りながら素通りしようとしたら、慌てた様子で呼び止められた。あれ？ ロンリータイムじゃなかったの？

「素通りするかな、フツウ」

私にも聞こえるくらい大きなため息をついて、それからまた不機嫌そうな表情に戻る。アッキー、百面相。どうしたんだろう？

「ちよつと来い」

ぶつきらぼうに言い置いて、アッキーは校舎の外に向かって行った。もしかして、アッキーが待ってたのって私だったのかな？ 来いって言うてるから、何か話があるのかも。

無言で私の前を歩いてたアッキーは人気がない裏庭で足を止めた。この辺り、金木犀が植えられてるからすごい匂い。まるで花束に埋もれてるみたいだね。って、ちよつと詩人っぽいこと考えちゃった。「お前、この間トモたちと遊んだだろ？」

金木犀を背に振り返ったアッキーが、真顔で話を切り出した。うん、遊んだよ？ でも、それがどうしたんだろう？

「何でオレを誘わねーんだよ」

そつえば、あの時はアッキーもアミもいなかったなあ。でもそ

れは、アッキーに声をかけなかったからじゃない。

「誘ったじゃん。レイナが」

レイナが電話して呼び出そうとしたけど、アッキーは忙しいって言って断ったのだ。それで何で、私が怒られるんだろう？ 私は首を傾げたけど、アッキーの不機嫌はまだ直らない。

「オレが言ってるのは、何でお前が誘わないんだってこと！ お前がいるって知らなかったし」

後半はゴニョゴニョ呟いてたから、何て言ったのか聞き取れなかった。でもアッキーが何で怒ってるのかは何となく分かった。けど、そんなこと言われても。

「だって、私が誘ったら来ないんでしょ？」

「は？」

「もう誘うなって言ってたじゃん」

「オレが？ いつ？」

「前に家まで送ってくれた時。次誘ったら容赦しないとかが言ったから」

「あ、あれは！ そーゆー意味じゃねーだろっ！」

アッキー、顔を真っ赤にするくらい怒ってる。もしかして私、意味を取り間違えた？ でも、だったらあれはどういう意味？

「……もう、いい」

またしてもアッキーにため息つかれちゃった。最近ため息多いなあ、アッキー。

「とにかく、あれは誘うなっていう意味じゃねーから。遊びには誘えよな」

諦めたような表情をして、アッキーが私を諭すように言う。そんなこと言うくらいだからアッキー、拗ねてたのかな？ 子供みたいでカワイイなあ。

「じゃあ、今誘っていい？」

「今？」

「うん。アクア行きたい。パフェ食べたい」

「……食い気優先かよ」

何故か遠い目をしながら、それでもアツキーは頷いてくれた。なんだ、誘っても良かったんだ。だったらアツキーと一緒にいきたい場所、いっぱいあるよ。カラオケとか、シヨツピングとか遊園地……は、やめておこうかな。

## 第17話

文化祭は特にバイトも入らなくて、アミと食べ歩きをして満喫した。でもアッキーも結局歌わなくて、去年に比べたら少し楽しさが減った感じだったかな。本当に何事もなく、フツウに過ぎたって感じだった。

普通と言えば、避けられてたりしたのが嘘みたいにアッキーと二人でどこかへ行く機会が増えた。アッキーから誘ってくれたり、私から誘ったり、それを繰り返してるうちに二人でいるのが自然なことになりつつある。アッキーと一緒にいるのはすごく楽しいんだけど、なんだか不思議。いつかアッキーが私のことを「空気みたいなヤツ」って言ってたけど、私にとってもアッキーは空気みたいな存在だったのかな。

「もうすぐクリスマスだな」

クリスマスカラーに染まってる街を並んで歩きながら、アッキーが言った。そう、もうすぐクリスマスなんだよ。文化祭が終わったのがついこの間だったはずなのに、時間が経つのが早すぎる。

「アッキーは今年もライブ？」

「ああ。恒例みたいになっちまったからな」

「またチラシ、配るの？」

「もうできねーよ。この辺りじゃオレら、顔売れすぎてるから」

自信满满的な口調で言っつて不敵に笑ってみせるアッキーは、最近私服で出歩く時はサングラスをかけるようになった。なんか、芸能人のお忍びみたい。でもトレードマークのツンツン頭は休日でも変えないから、見る人が見れば分かっちゃうと思うけど。

「もちろん、来るよな？」

出た、有無を言わせぬアッキー節。でも正直に言つと、実はあんまり行きたくない。学校で皆と一緒にいる時やこうして二人でいる時はいいんだけど、ライブハウスに行くとアッキーが遠い。クラッ

カージャックで歌ってる時のアッキーが、普段は見せないような表情をするからなのかな。寂しくなっちゃうんだよね。

「何だよ？ まさか先約があるとか言わないよな？」

「うーん……どうだろう」

もしかしたら今年も、ハルちゃんに手伝いを頼まれるかもしれない。クリスマスは常連さんを集めてパーティーやるから、忙しいみたいなんだよね。去年の経験で、人手が足りないのはよく分かった。……そういえばお前、去年のクリスマスはどこかに泊まったって言ってたよな。先約って、そいつか？」

考え事してたら、いつの間にかアッキーの顔から笑みが消えていた。口調も何故か真剣っぽい。急にどうしたんだろう、アッキー。

「今からそいつのいるとこ、連れてけよ」

「え？ 今から？」

「そ、今すぐだ」

アッキー、白黒つけてやるとか怖い顔でばやいてるけど、誰と勝負するつもりなんだろう？ そういえば、ハルちゃんのお店に学校の人を連れてったことってないなあ。ターゲットにしてる年齢層が違いすぎるから好みが合わないかなって思ってたけど、アッキーなら大丈夫だね。なんたって、ジャン＝ジョエルが好きなんだから。

「いいよ。行こう？」

自分から行きたいって言い出したくせに、アッキーは驚いたような顔をした。わかんないなあ、その反応。しかもちよつと及び腰になってるのは、どうして？

「いいのか？」

真面目な感じでそんなこと訊かれたけど、いいも悪いもないよ。でもその後、「期待して」って言われたから、アッキーが何を言いたいのかやつと分かった。もちろん、大いに期待してよね。

シヨップピングを切り上げて、私とアッキーはハルちゃんのお店に移動した。ランチタイムは外れてたから、他にお客さんの姿もない。良かった、今はヒマみたい。

「マチじゃない。いらつしやい」

カウンターの向こうから出てきたハルちゃんが笑顔で迎えてくれた。けどハルちゃんの視線は、すぐに私から外れて移動する。その視線の先には呆気にとられてるアッキーがいる。

「お友達を連れて来るなんて珍しいわね」

ハルちゃんの顔、興味津々って感じだなあ。きつと色々想像を巡らせて楽しんでいるんだろうから、早く紹介しよう。

「同じ高校に通ってる、アクツアキトくん。ジャン＝ジョエルのライブに一緒に行った人だよ」

ジャン＝ジョエルの名前を出すとハルちゃんは納得したように頷いた。ハルちゃんへの紹介が終わったから、今度はアッキーにハルちゃんを紹介しないとね。

「アッキー、この人は前田晴美さん。私の従兄弟。ジャン＝ジョエルのプラチナチケットを譲ってくれた人だよ」

呆然としてたアッキーも、そこでハツとしたように頭を下げた。アイサツで頭下げるなんて大袈裟だなあ。まだアッキーの表情が硬いけど、ハルちゃんとは話が合いそうだから打ち解ければ仲良くなれるよね。

「マチ、テーブル席に座ってなよ。あつたかい飲み物出してあげるから」

「うん。ありがとう、ハルちゃん」

ハルちゃんがカウンターの中に戻って行ったから、私はアッキーを促してテーブル席に座った。サングラスをとったアッキーは店内を見回して、物珍しげな顔してる。こういうお店、他ではあんまり見ないもんね。

「去年のクリスマス、ここにいたのか？」

「うん。人出が足りないからって、ハルちゃんに手伝いを頼まれたの」

「なんだよ。オレは、てつきり……」

「てつきり、何？」

「……何でもねえ。それより、いい雰囲気のお店だな」

「期待して良かったでしょ？」

喜んで頷いてくれるかと思いきや、アッキーは複雑そうな表情を浮かべた。あれ？ 期待したほど良くなかったかな？

「シユミ、合わなかった？」

「そうじゃ、ねえだろ」

はあああゝつてため息を吐いて、アッキーはグツタリしちゃった。でもハルちゃんが飲み物を持って来てくれたのを見て、すぐに姿勢を正す。挙動不審っぽいよ、アッキー。

「ありがと、ハルちゃん。リクエストもしていい？」

「いいわよ。マチの聞きたい曲、かけてあげる」

微笑みながら頷いて、ハルちゃんは私の聞きたい曲も尋ねずに蓄音機に向かった。古いレコードに針が落ちて、アコースティックギターの音色が流れ出す。ジャン♯ジヨエルだ。さすがハルちゃん、分かってるね。

## 第18話

ゆっくりして行ってねっていうハルちゃんの言葉通り、私とアッキーはハルちゃんのお店でまったりとした時間を過ごした。最初は硬かったアッキーもすぐに打ち解けて、最後の方はハルちゃんだけじゃなく常連のお客さんとまで仲良くなってた。まあ、ハルちゃんのお店に通う人は音楽が好きな人ばかりだから当然と言えば当然かもね。

「すっげー楽しかった。また誘えよな」

ハルちゃんのお店からの帰り道、私を送ってくれながらアッキーはずっとはしゃいでた。ハルちゃんのお店、すごく気に入ってくれたみたい。一緒に行った人がアッキーで良かったなあ。

アッキーが楽しそうな顔をしてくれるたびに胸の中が嬉しさでいっぱいになっていく。アッキーが私の好きなもの、好きな場所、好きな人を、同じくらい好きになってくれるからかな。本当に嬉しくて、この気持ちをどうにかしてアッキーに伝えたいよ。

「……何だよ？」

あんまりにもじつと見てたからか、アッキーの顔から笑みが消えちゃった。照れくさそうにしてるアッキーもカワイイんだけど、また楽しそうな顔を見せてくれないかな。どうしたら笑ってくれるだろう？

「そんな、じつと見んなって」

今度は困ったような苦笑になっちゃった。なかなか、さつきみたいに笑ってくれないなあ。それなら、くすぐっちゃえ。

「わっ、バカ！ 何すんだよ！！」

脇腹をくすぐったら、アッキーは過剰なくらい身を引いた。コートの上から触ったのに、そんなにくすぐったかったのかな？ こうされるの弱いんだね、アッキー。弱点、発見。

「なんだ、その不穏な微笑みは？」

アッキー、見たくないものを見るような目で私のこと見てる。そんな反応されちゃったら遊ばずにはいられないよ。えい、もう一回触っちゃえ。

「待て！ バカ、やめろつてー！！」

うるたえて逃げ回るアッキー、カワイイなあ。でも三度目になると触らせてくれなくて、手を拘束されちゃった。アッキーの手、あったかい。いじめるのも楽しいけど、こういうスキンシップもいいなあ。

「次やったらどうなっても知らないからな」

そんなこと言われちゃったけど、手を捕まえられてるからもう出来ないよ。手を離す様子もないから、よっぽど脇腹をつつかれるのがダメだったんだね。うん、脇腹を触るのはもうやめるよ。

「別の場所なら触ってもいい？」

「触りたいのかよ？」

「うん。腕とか顔とか髪とか、触りたい」

「……頼むから、やめてくれ」

アッキーに頼まれちゃった。弱ったような顔してるけど、アッキーはスキンシップ嫌いなのかな？ でも嫌がってるようには見えなっただけだなあ。

「そんな風に見るなって」

「どうして？」

「困るから！」

あ、そっぽ向いちゃった。そっか、アッキーは困ってたんだ。困らせるのは良くないと思うんだけど、見たいよ。アッキーのこと、見てたい。

あ、また。気持ちと一緒に体が動き出して、気がついたらアッキーの腕をとってた。手をつなくより、こうしてる方があったかいな。それにアッキー、いい匂いがする。

「アッキーの部屋の匂いがする」

「部屋の、におい？」

頭の上の方からアッキーの訝しげな声が降ってきた。腕を組むのもいいけど、こうしていると顔が見えないなあ。アッキーの顔見たいから、ちよつと離れよう。

「アッキー、香水つけてる？」

「あ？ ああ、まあ……」

それまでぼんやりしてたのが、アッキーはハツとしたように私から目を逸らしながら頷いた。やっぱりこれ、香水の匂いだったんだ。控えめで、いい香り。でもちよつと離れると香りが届かなくなる。もう一回、傍に行っちゃおうかなあ。

「もう勘弁してくれ。近付くな」

私が何考えてるのか見抜かれちゃったみたいで、行動を起こす前にクギをさされちゃった。うーん、残念。でもアッキーが余裕のなさそうな顔してるから、遊ぶのはもうやめておいた方がいいよね。

「ちゃんと、分かったのか？」

「うん？」

「……ぜってー分かってないな？」

「何のこと？」

「もういい、分かった。お前はオレだけ見てる」

「？ うん」

よく分からないけど、アッキーがそう言うなら見るよ。私は言われた通りにしたただけだったのに、アッキーはやっぱりため息をついたのだった。

## 第19話

二学期の期末テストも終わって、冬休みに入った。初日の今日は、クリスマス。恒例になっちゃったっていうアッキーのライブがある日。今年はハルちゃんに手伝いを頼まれることもなかったの、アミと二人でジュライボックスに出かけた。皆も誘ったんだけど、予定があるんだって。まあ、クリスマスだもんね。

いつもの顔ぶれの中でトモくんだけは相手がいらないみたいだったけど、一緒に行くメンバーが私とアミだけじゃ来れないよね。まだ引きずってるのかな、トモくん。っていうか、アミにクリスマスを過ぎす相手がいないことにも驚き。でもアミはクラツカージャックのファンだから、もしかしたら彼氏よりライブを優先させてるだけなのかもしれない。それはそれで彼氏が可哀想かも。まあ、アミに彼氏がいるならの話だけど。

クリスマスを迎えた街はそれだけで活気づいてるんだけど、ジュライボックス周辺はまた一段と盛り上がってる。クラツカージャックのワンマンじゃないから、チケットはすぐ競争率が高かったんだってアミが言ってた。それでも、集まってる人のほとんどはクラツカージャックのファンらしいんだけど。

前に来た時よりもさらにぎっしりお客さんが詰まった会場で、クリスマスライブはスタートした。アッキーたちの出番は一番最後みたい。私は他のバンドのことは何も知らなかったんだけど、アミが説明してくれたりしたから知らない曲でもそれなりに楽しめた。やっぱり、どのバンドもクリスマスソングをやるんだね。中には有名ミュージシャンの曲を演奏するバンドもあって、それはそれで面白かった。

ライブ開始から一時間半くらい経って、クラツカージャックがステージに上がってきた。アッキーが登場するなり、すごい歓声が上がってる。相変わらずキヤーキヤー言われてるなあ、アッキー。や

つぱりここに来ると、アッキーが遠い人になっちゃう。

『あー、メリークリスマス。ってことで、さっそく新曲。出し惜しみはナシな』

マイクを通して聞く、アッキーの声。ファンに向けたメッセージ。そして、アッキーのMCに答えるファンの女の子たち。最初から分かっていることだけど、ライブだね。あのステージの上には私たちがよく知ってるアッキーはいない。それが、ライブなんだよね。

『WISH!』

アッキーが曲名を言い終わるタイミングに合わせて前奏が始まった。聞きやすい、アツペンポの曲。ライブハウスの外で配ってた、綿雪みたいな飾りを皆振ってる。そっか、クラツカージャックのクリスマスソングなんだね。今までのクリスマスソングはバラード系が多かったけど、アッキーらしい明るい曲だなあ。優しい気持ちになれるから、歌詞も好き。

WISHって曲の後はノリのいい曲を連発して、クラツカージャックはお客さんをのせてた。WISHを含めて三、四曲演奏して、次がラスト。あ、この曲……前のライブでも最後に演奏したバラードだ。恒例、なのかな？

お客さんが聞き入ってる中、アッキーは切ない歌詞に息を吹き込んでる。この曲の作詞、アッキーがしたのかな？ 胸がしめつけられるくらい切ない表情を見せるのは、アッキー自身の想いが秘められているからなのかもしれない。片思いつて、苦しいね。

最後の曲の途中でふと、アッキーと目が合った。あ、すごい。私はずっとアッキーを見てたけど、こんなにお客さんがいるのにアッキーも私のこと見てる。でもアッキー、何だか素の表情に戻ってない？ 歌い方も歯切れが悪くなっていった、ついには歌うのをやめちゃった。

アッキーが口をつぐんじやったからなのか、演奏も止まっちゃった。初めは演出だと思ってたお客さんもざわつき始めてる。私も演出なのかと思ってたんだけど、違うみたい。ステージに立ってスポ

ツトライトを浴びてるのに、アッキーが素顔に戻っちゃってる。痛ましいくらいに狼狽えてて、最後にはステージの袖に姿を消してしまった。どうしちゃったんだろう。

結局、クラツカージャックの演奏は中途半端な感じで終わっちゃった。何が起きたのか分からない気持ちの悪さがお客さんにも残っちゃって、後味の悪い印象がついちやった感じ。ライブの後はあちこちでアッキーを心配したファンが騒いでて、とてもじゃないけど楽屋に行ける雰囲気じゃなかった。でも、気になるよ。アミも、同じ気持ちだったみたい。

「行こう」

アミはそう言って、女の子たちが集まってる裏口から遠ざかった。向かったのは、ライブハウスの中。もうお客さんの姿もなくて、ライブハウスの中はガランとしている。さっきまであんなに人がいたのがウソみたいに寂しい眺め。

「あ、やっぱり来てたか」

私たちに目を留めて近付いて来たのは、クラツカージャックのギターの人。名前は……確か、馬場くんだったはず。アッキーの幼馴染みで、アミとも仲がいい。

「アッキーは？」

アミが問いかけると馬場くんはため息をついた。それから、ステージ脇の方を振り返る。

「楽屋。すげー荒れてる」

荒れてるって……アッキーが？ 自信満々で優しいアッキーしか知らない私には想像がつかなかったけど、アミは馬場くんの話を聞くとすぐに歩き出した。そっか、ステージから楽屋に行けるんだ。どうしよう、私も行こうかな？

まごついてたら、馬場くんが楽屋まで案内してくれた。ステージの裏を通って行くと、すぐに開きっぱなしの扉がある。その中が楽屋になってるみたいなんだけど、私が足を踏み入れるより先にすごい音がした。

「黙ってる!!」

今の……アッキーの声？ 知らない人の声みたいに低くて、すごく怖い。

「行くの、やめとく？」

馬場さんに声をかけられて、ハツとした。私、立ち止まっちゃってる。でもアミもいるんだし、ここまで来て行かないわけにもいかないよね。

馬場さんに続いて楽屋に入ると、アッキーが睨むように振り返った。入って来たのが私たちなのを見て、舌打ちが聞こえてきそうな表情で視線を外す。憤りを堪えられない様子でアッキーは椅子を蹴り倒した。

「くそっ……!!」

小さく聞こえた、呟き。目の前にいる男の子は、誰？

「いいから、帰れよ!!」

平然と佇んでるアミに向かって、アッキーが苛立たしげに声を荒げた。怖い。こんなアッキー、見たことないよ。

「マチ、先帰って。あたしは、もうちょっといるから」

私のところへ来たアミが囁くような小声で言った。でも、アミ……

アミに応えたかったんだけど、唇が震えてて声が出なかった。馬場くんにもアミと同じこと言われて、私だけ楽屋の外に出された。申し訳なさそうな表情をした馬場くんが、扉を閉める。その後には何があったのか、私は知らない。

## 第20話

クリスマスの翌日、アミからメールが来た。ライブが思い通りにいかなかった後のアッキーはいつもあんな感じだから気にするなっ  
て書いてあつて、もう大丈夫だからとも書かれていた。ケータイの履歴を見れば私が出した返信メールも残ってるだろうけど、アミにどんな内容を返したのかは覚えてない。自分の送ったメールを見ようという気も起らなかった。

初詣にも行かず、一人で出かけることもせず、冬休みはあつという間に過ぎ去って行った。クラスが違うこともあつて、新学期が始まってからもアッキーとはまだ顔を合わせてない。あけましておめでとうすら言っていないけど、どうしてるかな、アッキー。

クラスが違うついても隣なんだから、会おうと思えばいつでも会える。それでも顔を合わせなかったのは、私の方が避けてたかなのかな。いつかとは、逆だね。どんな顔していいのかわからないって言ってたアッキーの気持ち、今はよく分かるよ。

灰色の気分で日々を過ごしたら、一月の終わりに空まで灰色になった。雨が降り出したから帰るに帰れなくなっちゃって、久しぶりに屋上で時間を潰すことにした。そしたら、凍えそうなほど寒い屋上には先客の姿があつたんだよね。

屋上の扉の横うちよで雨をしのぎながらコンクリートに座り込んでるのは、アッキー。屋上に出た瞬間にアッキーの姿を見つけた時は一瞬引き返そうかと思っちゃったけど、結局は後ろ手に扉を閉めた。冷たい雨は、ざあざあ。この寒さだと、そのうち雪になるかもしれない。

「久しぶり」

アッキーの声がしたので振り向くと、座り込んだ体勢のまま私を見上げてた。その顔に、表情はない。どうしたらいいのかわからなくて、とりあえずしゃがみ込んだ。そしたら、アッキーの顔を見な

くてすむから。

「またシカト？」

「……違うよ」

一人でこんな所にいるってことは誰とも話したくない気分なんだろうけど、話しかけてくれる。でもやっぱり、どうしていいのかわからない。わからないから、何も言わずに空を眺めてた。アッキーも黙り込んで、きつと空を見てる。

「雪に、なるかな？」

「ああ、なりそうだな。つーか、なればいい」

雨なら濡れるけど、雪ならそんなに濡れないから帰りが楽になる。アッキーがそんなこと言うから笑って頷いた。そうだね、雪になればいい。

「あけましておめでとう」

私が言うと、アッキーは変な顔した。それから髪型が崩れないよう器用に頭をかく。

「そっか。おめでとう」

「うん。おめでとう」

「一回言うなよ」

くどいって、言われちゃった。でもなんか、嬉しいな。いつものアッキーだ。

「アッキー、顔が赤いよ。いつからいたの？」

アッキーはコートも着てなくて、ブレザー姿のまま。セーターは着てるけど、こんな雨の中じゃ薄着だよ。私に言われて初めて寒さが沁みしてきたのか、アッキーは小さく身震いした。

「いつからだったかな。だいぶいるような気、するけど」

分からなくなっちゃうくらい、ずっといたんだ。アッキーの腕に触れてみると、制服が驚くほど冷えてた。凍っちゃうよ、アッキー。うわっ、ほっぺも冷たい。

「……あんま、不用意に触んなって」

「あ、ごめん。イヤだった？」

「イヤじゃねえけど……お前、気軽に触りすぎだろ」

イヤじゃないけど気軽なのはイヤなんだ？ それって、結局イヤだっただけかな？ ちょっと自粛しよう。

「へこむな。イヤとは言っていないって言ってるだろ」

……どつちよ。相変わらず分かんないなあ。でもホント、いつものアッキーだ。

「……アッキー」

「なんだよ？」

「あつたかいもの飲みたい。アクア行こう？」

「……深刻そうな顔して何を言い出すかと思えば、それかよ」

アッキーは呆れたような顔をしてたけど、そのあと急に笑い出した。何がおかしいんだろう。私、何か笑われるようなこと言ったかな？

「分かった。行こうぜ」

笑いながら立ち上がったアッキーは、私に手を差し出してきた。アッキーの笑顔、久しぶりに見たなあ。嬉しくて、ちょっと泣きそう。

「うん。行こう」

手を取ると、アッキーはそのまま私を引き上げてくれる。お互いに立ち上がった後も自然と手をつないだまま、雨降りの屋上を後にした。

## 第21話

バレンタインデーを間近に控えたある日、アミから突然話があるって呼び出された。同じクラスで毎日話してるのに、改まって何の話だろう。しかも教室じゃ話せない内容らしくて、屋上まで連れて行かれた。屋上と言えばアッキーだけど、さすがに今日はいない。

冬の屋上は、寒い。しかも最近雪が降ったばかりだから、日陰では融けきらない雪が残ってる。見るからに寒々しい光景だなあ。吐き出す息も白いよ。

「それで、どうしたの？」

声をかけると、少し先を歩いていたアミは立ち止まって振り向いた。その顔は、真剣そのもの。こんなに真剣な顔見るの、初めてだよ。一体どうしちゃったんだろう。

「あたし、アッキーが好きなの」

えっ？ 唐突にそれだけ言われても、どう反応していいのか分からないよ。それに、アミがアッキーのこと大好きなの、私知ってるし。

「急にどうしちゃったの？」

「……分かってなさそうだから一応言っておくけど、友達として好きだって言ってるんじゃないから」

私の反応がイマイチだったのか、アミはわざわざそう付け加えた。えーっと、それはつまり、アッキーと付き合いたい「好き」ってことかな？

そうやって聞かされても、あんまり驚きはなかった気がする。うん、私、アミがアッキーのこと好きだって知ってたよ。それが恋愛の「好き」だっていうのも、何となく分かった。でもそれを、何で私に言うんだろう？ それはアッキーに言うべき科白じゃないの？ 「クリスマスの日のこと、覚えてる？」

私から視線を外しながら、アミは話題を変えた。寒々しい風景で

もなく、もつと遠くを見てる目。アミ、どんな想いであの日のことを切り出したんだろう。

「……うん、覚えてるよ」

「あの日、荒れてるアッキーを宥めてて思ったんだ。この人の傍にいたい、って。それで、アッキーのこと好きだったんだって気がついた」

「……そっか。あの日、アミも大変だったんだ。ライブの後に何があったのか私は知らないけど、そういう経緯で自分の気持ちに気がついたってというのは納得だよ。」

「バレンタインにチョコ渡すつもり。だから、マチとは前みたいになれないと思う」

「……うん」

「心が狭くて、ごめん。でも、負けないから」

言い切って、アミは一人で屋上を後にした。取り残された私に吹き付ける冬の風は、当然のことながら冷たい。でも、そういう理由なら仕方ないよね。その感情はきつと、誰にも止められないものだから。

「……寒いなあ。ハルちゃんのお店に寄って、あつたかいココアでも飲んでから帰ろう。こんな日はブルースでもかけてもらって、一人で耳を傾けたい。」

もつ言う機会を逸したっばいけど、本当のことを話してくれてありがとう。自分では心が狭いなんて言ってたけど、嬉しかったよ、アミ。

バレンタインにはチョコを作ろうかと思ってたんだけど、ア

ミの話を知ったらその気もなくなっちゃった。だからバレンタインは私にとって無関係な日になった。アミが本命チョコを渡したのかどうか、アッキーが受け取ったのかどうかも、知らない。

短い三学期はあっという間に過ぎ去って、アミと疎遠になったまま春休みに入った。もともとアッキーたちと一緒にいたのはアミがいたからであって、アミとぎくしゃくしてから皆と過ごす時間も自然に減った。だけどアッキーとも顔を合わせてないかって言えば、そうでもない。だからチョコをあげなかったことに文句言われたりもしたけど、そんな気分じゃなかったんだって。

「お前さ、最近オレのこと避けてないか？」

アッキーが唐突にそんなこと言い出したもんだから、カップを落としそうになっちゃったよ。あーあ、ハルちゃんが淹れてくれた紅茶がこぼれちゃった。アッキーのバカ。

「……避けてないよ」

「そうだよな。オレじゃなくて、横田のこと避けてる感じだよな」  
テーブルの上を拭いてた手が、止まっちゃった。アッキー、変なところで鋭いなあ。

私に宣言した翌日から、アミは今まで以上に積極的になった。もともとアッキーと一緒にいることは多かったけど、最近はどこで見かけても一緒にいるんだよね。アミと一緒にいたらアッキーにも話しかけづらい。だから避けてるって言われれば、避けてるんだろうなあ。

アッキーに「何で？」って聞かれたけど、そんなの答えられるわけないでしょ。アッキーがそうやって探ってくるなら、私もアッキーの痛いところを探ってる。

「ライブ、やらないの？」

最近のアッキーはヒマそうにしていることが多い。ライブがあれば精力的に動いてるはずだから、それで予定がないって分かっちゃうんだよね。たぶん、あのクリスマスの時から歌ってないんじゃないかな。

やっぱり痛い話題だったみたいでアッキーは黙り込んだ。私への追求もなくなっただけど、それから会話が途絶えてる。アッキーが黙ってても気まずくは感じないんだけど、さすがに悪いことしたかなって気にはなった。

「二人してなに黙りこくってるの？」

店内に流れてた音楽も途絶えてたので、ハルちゃんがカウンターから出てきた。ナイスタイミング、ハルちゃん。でも、どうやって答えよう。

「昔、マーティアのボーカルが歌えなくなったことがあったよね？」  
アッキーが脈絡のない話を突然始めたもんだからハルちゃんが首を傾げてる。でもアッキーの言ってる出来事が記憶にあるみたいで、ハルちゃんは頷いた。

「十五年くらい前だったわよね、確か。その歳で、よくそんなことまで知ってるわねえ」

「ハリスの自叙伝を読んだんだ。ハルさんも読んだ？」  
アッキーが言ってるハリスっていう人はマーティアってロックバンドのボーカルだった人。そこまでは知ってるけど、自叙伝とかは知らない。でもハルちゃんは知ってるみたいで、アッキーと二人で盛り上がったる。

ハリスが歌えなくなっちゃったのは喉の病気が原因だったみたい。でも病気を克服して、ハリスはまたマーティアに戻って来た。病気に勝てたのは歌が好きだったからだっていうハリスの科白に、アッキーは感動したんだって。でも何で、急にそんなこと話し出したんだろう。

「オレも今、歌えなくて。だから歌えなかった時のハリスの気持ちがよく分かるんだ」

ああ……なるほど、そういう話につながるんだ。アッキーの話を聞いたハルちゃんは無言で、蓄音機に向かった。その後に流れてきたのはマーティアの名曲。アッキーと目で無言の会話をして、ハルちゃんはカウンターに戻って行った。なんか、すごく疎外感を覚え

るなあ。

アツキー、何で歌えなくなっちゃったんだろう。病気……じゃ、ないよね。聞きたいけど、訊いていいのかな。……やめとこう。誰にでも触れられたくないことってあるよね。

頬杖ついてるアツキーは目を閉じて、マーティアの名曲に聞き入ってる。指がリズムを刻んでるけど、無意識かな？ 鼻歌でも歌いだしそうに気分良さそうにしてるけど、それでもアツキーは歌わない。歌いたいけど、歌えないんだろなあ。何でか分からないけど、早く歌えるようになるといいね。

## 第22話

短い春休みが明けて、私たちは高校三年生になった。今年はよく一緒にいたメンバーの誰とも同じクラスにならなくて、正直に言うところちょっとホッとしている。このまま自然と距離が開いていくのは寂しいけど、仕方ないよね。こればかりはどうにもならないことだもん。

高三にもなると進路のこともあって、忙しくなった。私は大学に行くつもりだから勉強しなきゃいけないし、大学の資料を集めたりとかしなきゃいけない。だからあんまり遊んでる時間もなくなっちゃったんだけど、アッキーはそうでもないんだよね。歌えないって言ってもプロになる夢を諦めたわけではないみたいで、卒業後は音楽活動に専念するんだって。だったら尚のこと早く歌えるようにならなくちゃいけないんだろうけど、相変わらず歌えない日々が続いてるみたい。

夏になって模試を受けた帰り、たまたまアッキーの家の近くを通りかかった。メールとかではやりとりしてるけど、最近顔を合わせないなあ。アッキー、元気にしてるかな。せっかくだから訪ねてみようかなとも思ったんだけど、お兄さんに追いつかれた時のことを思い出したからやめることにした。

帰ろうと思って歩き出そうとしたら、すごいタイミングでアッキーの家の玄関が開いた。中から出てきたのは……あれ？ あの人、馬場くんか。クラツカージャックのギターの。

「あ」

馬場くんも私に目を留めて、驚いたように声を上げた。その後ろから、アッキーのお兄さんがひよっこりと顔を覗かせる。そういえば、アッキーと馬場くんって幼馴染みなんだっけ。

アッキーも一緒なのかと思ったけど、出てきたのは馬場くんとお兄さんだけだった。アッキーは留守らしいので帰ろうとしたら、何

故がお兄さんに呼び止められてしまった。まるで自宅感覚で、馬場くんまでアッキーの家に上がっていけとか言う。何だろう、この展開。

アッキーのお兄さんと馬場くんに押し切られて、私は何故かアッキーのいないアクツ家にお邪魔することになった。通されたのは、アッキーの部屋。本人いないのに、いいのかなあ。

「この前はって言うてもだいぶ前だけど、ごめんね」

本当に今更な感じでアッキーのお兄さんに謝られた。さすがに一年も前のことだから気にしてもいませんよ。それでもトラウマがあるのか、アッキーのお兄さんはちよつと怖い。

「横田って子がアキトの彼女だと思ってたからさ。君には悪いことしたなーって、気になってたんだよ」

気にしてたというわりに、アッキーのお兄さんの表情は明るい。というか、軽い。ま、まあ、別にいいんだけど。それにアミのこと彼女だと思ってたんなら、その他全員ファンに見えても仕方ないしね。

「アキトのやつ、まだ歌えないんだよ。だからクラッカージャックも活動休止状態でさ。何とかしてくれよ」

馬場くんが情けない声を出したけど、何とかしてくれって何？私にどうしろっていうの？

「アッキー、何で歌えなくなっちゃったんですか？」

そもそも、私はその理由からして知らない。だけど二人は私が知ってるのが当然だと思ってたのか顔を見合わせる。それから、二人そろってわざとらしいため息をついた。

「これじゃアキトのビョーキが治らないはずだよ」

「えっ、アッキーって病気だったの？」

馬場くんが妙な言い出すから、ハルちゃんのお店で聞いたアッキーの話が蘇ってギョツとした。もしかしてあれ、本当の話だったの？ そうだとしたら、どうしたらいいのか分からないよ。

「もしかして、喉の病気とか？」

私は真剣な話をしてたのに、二人は何故か呆れたように息を吐いた。何なのよ、もう。

「体の病気じゃないよ。アキトの場合はそうだな、心の病？ それも不治の」

不治の病って……お兄さん、茶化しすぎ。顔も笑ってるし、どう見てもそれは冗談だよな？

「今度、アキトにとって恋愛ってどんなものか聞いてみなよ。きっと面白い答えが返ってくるから」

笑いながらそんなこと言って、お兄さんはアッキーの部屋を出て行った。何が言いたいのかわからないよ。アッキーのお兄さんってつかみどころのない人だなあ。

「……活動再開は当分先だな」

諦めたように首を振って、馬場くんも立ち上がる。帰るって言うから私も一緒にアッキーの家を出た。馬場くんは何度もため息をつきながら去って行ったけど、結局二人は何を言いたかったんだろう？ 謎だよ。

## 第23話

馬場くんもお兄さんも私がアッキーの家に上がったことについては本人に言わなかつたらしくて、あの後アッキーからその話を聞くことはなかつた。私も忙しくて、そんなことすっかり忘れてたよ。思い出したのは、夏休みを目前に控えた晴れた日に屋上でアッキーに会ったから。

「オッス」

日陰になつてる場所でコンクリートに座り込んでるアッキーは私と目が合うなり片手を上げた。一人でいるけど、ロンリータイムではないみたい。それなら、隣に座ろうかな。

「ねえ、アッキー」

「なんだよ」

「アッキーにとって恋愛ってどんなもの？」

お兄さんに聞いてみるって言われたから訊いてみたら、アッキーは黙っちゃった。不機嫌そうに眉根を寄せてるから、答えてくれないかもしれない。そう思ったんだけど、アッキーはしばらく間があった後にちゃんと答えてくれた。

「言葉に出来ない衝動」

えっと……真剣に答えてくれたのはいいんだけど、どういう意味だろう。突っ込んで尋ねたら、答えてくれるかなあ？

「それって、どんな感じなの？」

「たまに、何もかもどうでも良くなってメチャクチャにしてやりたくなる。相手の気持ちとか無視して好きなようにしたいっていう、そういう感じだ」

好きなようについて……。よく分からなかつたけど、アッキーがあまりにも真剣な目で見てくるから聞けなかつた。いつものアッキーじゃない。それがクリスマスライブの後で見たアッキーと重なって、怖くなった。

「そ、それがアッキーにとつての恋愛なの？」

苦し紛れに質問したら、アッキーはふっと笑った。ラブソングみたいにくまうはいかねえよとか言って苦笑いしてるけど、アッキーがそんなこと言うなんて意外だよ。ラブソングに息を吹き込むのはアッキーじゃない。そんな、否定的に言わないでほしい。

会話が途切れたから、アッキーは私から視線を外した。ぼんやり空を見上げてるアッキーの横顔には覇気がない。今のアッキー、又ケガラみたいだよ。あの自信に満ち溢れてたアッキーはどこ行っちゃったの？ やっぱアッキーは歌ってないとダメだ。

そもそも、アッキーは何で歌えなくなっちゃったんだろう。お兄さんや馬場くんは好き勝手なこと言ってたけど、本当の原因が何なのか私には分からない。分からないから、励ましたくても励ませない。私が励ましたからってアッキーが立ち直れるわけでもないかもしれないけど、アッキーが今のままなのはイヤだよ。

「ねえ、アッキー。何で歌えなくなっちゃったの？」

あのクリスマスの日からずっと聞きたかったことを、初めて言葉にしてみた。アッキーは空を見上げたまま一言、「ウソくさくなつたから」って言う。意外とあっさり答えてくれたけど、何がウソなんだらう。

「ウソって、何が？」

「オレが今までに書いてきた歌詞。特にラブソングなんてひでーもんだよ。上辺だけ意識しすぎて、キレイごと並べてただけだった。恋愛なんて、そんなもんじゃねえのにな」

だから歌えなくなつたし歌詞も書けなくなつてしまったのだと、アッキーは言う。作詞関係のことは私には分からないけど、それって今のアッキーの感情と、そのラブソングを作った時のアッキーの感情がかみ合わなくなっちゃったってことかな。でも、それって自然なことなんじゃない？ 昔は嫌いだった食べ物を好きになることもあるみたいに、時間が経てば何でも変わるんだから。

「だったら、今のアッキーの気持ちを歌にすればいいんじゃないの

？」

って、簡単に言っちゃった。よくよく考えてみればオリジナルの曲をつくるってすごく大変なことなんだろうね、たぶん。私はやったことがないから想像するしかないけど。

シロートに何が分かるんだって怒られるかもしれないと思ったけど、アッキーは驚いた顔で私を見てる。しばらく呆けてたけど、アッキーはやがて頷いた。

「お前の言う通りだ」

生気を取り戻したアッキーは興奮してるみたいな表情で私を振り返った。もう、考え事もしてないみたい。アッキーのすつきりした顔、久しぶりに見れて嬉しいよ。

「よっしゃ！　そうと決まれば曲づくりだ！　今度こそ泣かしてやるからな、覚悟しとけ」

捨て台詞みたいに言い置いて、アッキーは勇ましく屋上から去って行った。あんなに悩んでる風だったのに、もう立ち直っちゃった。でもアッキーは、やっぱりああじゃないとね。

## 第24話

半年くらい歌えないって悩んでたにもかかわらず、アッキーの復活は劇的なまでに早かった。私に「泣かしてやる」って宣戦布告した日には曲作りを始めたらしくて、それ以来ライブをするために動き回ってるみたい。たまたま街で馬場くんに会った時、よく分からないけどすごく感謝されちゃったよ。私、何もしてないんだけどね。前はたまにアッキーから遊びに誘われることがあったんだけど、夏休みごろになるとそれもぱったりなくなつた。私は私で追い込みの時期だったから、一度も顔を合わせることもなく高校生活最後の夏休みは明けちゃった。それから、さらに一月。十月くらいになると、うちの高校は文化祭の準備で慌しくなる。アミに呼び出されたのは、そんな秋の日のことだった。

一人で出かけた街では街路樹が葉を散らせ始めていて、これから日を追うごとに寒くなるのを予感させる。ショーウィンドウにはコートを羽織ったマネキンが立ってるし、食べ物屋には秋の味覚が満載。待ち合わせ場所のファミレスにも秋の新作メニューがでかでかと掲げられていた。イモとクリのパフェだって。頼もうかなあ。

店内に入るとすぐ、アミの姿が目にとまった。窓際の席で頼杖をついて、窓の外を眺めてる。浮かない顔してるけど……あたりまえか。アミはもう、私と友達でいられないって言ってたんだもん。

「……久しぶり」

テーブルに近寄るとアミが私に気付いて、軽く手を上げた。ホント、久しぶりだね。こうして面と向かって話すの、何ヶ月ぶりだろう。三年に進級するまでは、毎日のように顔を突き合わせていたのに。

とりあえず、アミの向かいにある空席に腰を落ち着けた。何か頼めばってアミが言うから、さっき店の入口で見たイモとクリのパフェを注文してみる。アミは無難にモンブランを注文した。こうして

ると、毎週末のように食べ歩きをしてた一年の頃を思い出すなあ。  
あの頃は楽しかったね。

ウエイトレスが去ってから、アミは私に視線を傾けてきた。アミが話を切り出してくれなきゃ、私から言うことは何も無い。アミが何の話をしたくて私を呼び出したのか、分からないから。

「あたし、さ……」

言いにくそうに目を伏せながら、アミが話を切り出した。その後続いた言葉は「彼氏ができた」だって。それって、やっぱり……。馬場くん、知ってるでしょ？ クラツカージャックのギターの人って、ええ！？ 何でそこで馬場くんの名前が出てくるの？

「アツキーじゃないの？」

思わず身を乗り出しながら尋ねたらアミに呆れた顔されちゃった。アミのそういう顔見るのも久しぶりだなあ。でも、話が見えないよ。「アツキーは……諦めた。ってゆーか、諦めるしかなかった」

なんか、ものすごく切なそうな顔してるけどアミに何があったんだろ。しばらく話してないけど、このあいだ校内で見かけたアツキーの方にも変わった様子はなかったような気がする。その時はフツウに、アミとかトモくんとかも一緒にいたし。

「先に言っとくけど、理由は言わないからね」

私が絶対理解してないと思ったのか、アミはしっかりとクギを刺してくる。まあ、理由を訊くのもどうかとは思うけど。それで、何で馬場くんなんだろう。

「馬場くんから告白されたの？」

尋ねると、アミは頷いた。良かった、逆じゃなくて。もし逆だったらアミに避けられてた私の立場はどうなるの？

でも、そっかあ、馬場くんかあ。確かに、アミと馬場くん仲良さそうにしてたもんね。だけどアミ、まだアツキーのこと好きなんじゃないのかなあ。それで馬場くんと付き合って、本当にそれでいいの？

「あたしがまだアツキーのこと忘れられないって言ったら、馬場く

んはそれでもいいって言うてくれた。だから、付き合うことにしたの。たぶんそのうち、アッキーのことなんて忘れるよ」

私の考えてることなんてお見通しなのか、アミは自分から付け加えてくれた。でもそれって、ノロケっていうんじゃないの？ まあアミがそれでいいなら私が口を出すことじゃないけど、ちょっと複雑。

「だから、さ。もうマチを避ける理由もないんだよね。都合のいい話だけど、マチさえ良ければ……」

そこまで言いかけて、アミは口をつぐんじやった。だけどその後によく言葉は分かるよ。

「うん。友達に戻ろう？ っていうか、戻ってくれる？」

私の方から切り出したらアミは驚いて目を丸くした。それから、いつもの呆れた表情になる。

「あたしが言うのも変だけど、マチってさっぱりしすぎじゃない？」

「そうかな？」

確かに避けられてはいたけど、アミを避けてたのは私も同じだからお互いさまだよ。それに避けられてはいたけどいびられたりかはしてないし、アミがそうしなきゃならなかった理由も分かってる。だから、嫌いになる要素が何もなかっただけなんだけ。

そんな話をしていると、さっき注文したものが運ばれてきた。イモとクリのパフェ、見た目からして美味しそう。イモはクリームなんだね。丸ごと乗ってるクリも秋っぽくていい。

「食べよ？ アミのモンブランも美味しそうだよ」

「……負けた。完敗だわ」

小さく首を振ったアミはふと、誰かに同情を寄せてるような目をした。かわいそうなアッキーとか言ってるところを見ると、同情されてるのはアッキーみたい。アミが呟いてたことはよく分からなかったけど、口に運んだパフェは秋の味がして美味しかった。

## 第25話

ファミレスで和解してから、私とアミの関係は一年の頃と同じ感じに戻った。今年の文化祭は一人で模擬店食べ歩きしようかなって思ってたんだけど、アミが付き合ってくれたから楽しさ倍増。今日が終わればまた受験のことで頭がいっぱいになるんだらうけど、せっかくの文化祭なんだから今日は楽しみたい。こうして高校の校内を歩き回るのも最後だし、ね。

一年生の教室で買ったタコヤキを四階の片隅でつついてたら、急に周囲が慌しくなった。あちこちの教室から人が出てきて、私たちの前を走り去って行く。なんだか階段を上って来る人たちも急ぎ足だけど、何かあるのかな。

「行ってみる？」

アミがそう言うから、私たちも人波の中に身を投げることにした。どこからともなく溢れ出してきた人たちは屋上に向かってるみたい。よくよく見れば、女の子ばかりだなあ。

押し流されるようにして屋上に出ると、途端にエレキギターの爆音が響き渡った。祭りの熱気に煽られてることもあって、集まってる人たちから悲鳴のような嬌声上がる。後ろから押される勢いが激しくて、いつの間にかアミとはぐれちゃった。でも戻ろうにも、もう身動きが取れない。歌が始まったみたいだったけど、あれ、この声って……。

アミを探してキョロキョロしてた視線を上げてみると、周囲の人たちより少し高くなった所にステージがあった。その上に、制服姿のアッキーがいる。やっぱり、この歌声ってアッキーだ。そっかあ、歌えるようになったんだね。でも屋上でライブやるなんてパンフレットにも載ってないから、これってゲリラライブ？ いつかみたい。に即席バンドじゃなくてクラッカージャックのメンバーがいるけど、何も言ってなかったからアミも聞いてなかったんだらうなあ。

色々と思うことはあつたんだけど久しぶりにアッキーの歌声を聴いちゃったもんだから、いつの間にか考えることを忘れてた。ああ、アッキーはやっぱりステージの上に立つてるのが似合ってるよ。この場所で無気力に過ごしてたのがウソみたいに今はキラキラしてる。でも今演奏してる曲、今までに聴いた曲とはずいぶんと感じが違うなあ。抱きしめて、キスして、壊したい、だって。いつか言つてた『言葉に出来ない衝動』っていうのの事を言ってるんだらうけど、メロディに乗せて聴くとハードな感じ。やらしいなあ、アッキー。

そっか、何か違うと思つたら、今までにないくらい歌詞が凶暴なんだ。今までのバラードは恋愛のこと歌つてもどこか『キレイ』だったもんね。これが今のアッキーの気持ち、なのかな。そう思うと、ちよつと怖い気すらする。あやうさ、みたいなものを感じるよ。『衝動』がむき出しになった激しい曲が終わつて、MCを挟まないで次の曲に入った。今度は打つて変わつて、出だしからして静かなメロディ。バラード、かな。

さっきの曲とは対極的な感じに、バラードの曲には優しい歌詞がつけられていた。だけど今までみたいに包み込むような優しさじゃなくて、情けない姿を見せてもいいから等身大で愛したいっていう感じの余裕のない気持ち表現してる。これもアッキーの今の気持ち、なのかな。

バラードの最後はアッキーの「愛してる」っていう科白で終わった。そういう曲だから、特定の誰かに向けられた科白じゃない。だけどアッキーが「愛してる」って囁いた時、どれだけの女の子が恋に落ちただらう。屋上を埋め尽くしてる女の子たちがうつとりした眼差しをアッキーに向けてるから、もしかしたら全員かもね。私は『雪が降ればいい そんな風に君の幸せを願う』ってところが好きだった。深いよ、アッキー！

ゲリラライブ自体は大成成功だったんだらうけど、その後が大変だった。やっぱり許可をもらつてなかつたみたいで、アッキーたちクラッカージャックはメンバー全員、先生にこっぴどく叱られた挙句

に職員室の前で正座させられてた。アミと二人で笑っちゃったけど、ちよつと可哀想だったかも。ファンは見に来るし、クラツカージャツクを知らない人も変な目で見ながら通り過ぎるし、さらしものだね。

アッキーたちが解放されたのは、結局一般公開が終わる午後五時だった。アッキー以外はうちの学校の生徒じゃないから、正座から解放されると同時に追い出されちゃったみたい。馬場くんが来てたから、アミは後夜祭を見ずに帰っちゃった。アッキーは……これからまた、改めて怒られるみたい。まあ、首謀者だもんね。

「聞いてたか？」

職員室に出頭する前、アッキーはそう言って私に声をかけてきた。さっきのライブのことだね。もちろん、聞いてたよ。

「また歌えるようになって良かったね、アッキー」

「ってことは、聞いてたんだな？ それで、反応はそれだけか？」  
「うん？」

それだけかって言われても、他に何を言えればいいの？ 詳しい感想を求められても、私には曲作りのこととか分からないから反応のしようがないよ。

私が困っているとアッキーは無言で紙を差し出してきた。二つ折りの紙を開いて見ると、そこには言葉が綴られてる。あ、これ、さっき歌ってた曲の歌詞だ。歌詞カードまで用意してるなんてすごいね。「それ見ても、分からないか？」

「え？ 分かるって、何が？」

歌詞カードから目を上げると、アッキーの真剣なまなざしにぶつかった。けどすぐ、アッキーは私から目を逸らしてため息をつく。呆れたような顔してるけど、何で？

「分からないんだな？」

「う、うん。ごめん」

「謝るくらいなら分かれ。って言っても無理そうだから、もうハツキリ言うしかないよな？」

そこで言葉を切つて、アッキーは表情を改めた。今のアッキーの顔、ライブで凶暴な想いを歌つてた時と同じだ。こ、怖い。

「マチ」

名前、呼ばれた。いつもは「お前」とかばかりだから、そんな風に呼ばれるとどうしたらいいのか分からないよ。あ、体が勝手に逃げてる。私の反応を見たアッキーは眉根を寄せて、それからまたため息をついた。

「……やっぱやめた。何でもねえよ」

何でもないって言った時、アッキーは私のよく知ってるアッキーに戻った。よ、良かった。先生の怒声が響いたからアッキーは職員室の方に行っちゃったけど、今のは何だったんだろう。

## 第26話

文化祭が終わると私はまた勉強一色の日々に戻った。三年生になってから頑張り出したんだけど、そのわりには推薦入試で志望大学に合格しちゃって、十二月のアタマには進路が決まっちゃった。だからもう頑張る必要もなくなっちゃって、卒業後はフリーターになるって宣言してるアミと遊びまわった。

そんなこんなで、二学期はあつという間に終わっちゃった。二十五日には学校主催のクリスマスパーティーがあつて、最後なので参加してみることにした。アミは馬場くんと予定があるので来てないでもサチやレイナたちは来てて、久しぶりに皆と一緒に過ごした。

今年はクリスマスライブをやらなみたいで、アッキーも来てた。でも女の子達に囲まれて、なかなか話しかけられない。話しかけるタイミングを探してるうちに、歌が始まっちゃったよ。文化祭のゲリラライブは怒られたけどアッキーの歌は人気があるから、今回は学校側からお願いしてみたかった。

アッキーが歌ったのはクラッカージャックの曲じゃなくて、一般的なクリスマスソング。クラッカージャックのメンバーもいないからアカペラだったけど、アッキーは歌唱力があるから十分響いてる。敵かな雰囲気っていうのかな。聞き入っちゃうよね。

歌が終わって壇上から降りても、アッキーはやっぱり女の子に囲まれて話しかけられなかった。人気がある証拠なんだろうけど、ちょっと複雑。学校の中なのに、遠い人みたいに感じるのは寂しいな。

ちやほやされてるアッキーを見てたら一人になりたくなっちゃって、こっそり体育館を抜け出した。外、寒い。見上げた空は灰色の雲で覆われていて、雪でも降り出しそう。本当は入っちゃいけないんだけど、校舎の中に入ろうかな。ちょっと気が早いけど、思い出に浸りたい気分。二学期が終わったら卒業、なんだよね。

本当は屋上に行こうかなって思ってたんだけど、校舎の中でも寒かったからそれはやめておいた。代わりに、一年生の時に使ってたクラスに侵入してみる。教室内の光景は変わらないんだけど、一年生の教室は四階にあるから窓からの眺めが違うよね。窓際の席、懐かしいなあ。ここで初めて、アッキーのこと知ってたんだよね。

そんなこと考えてたらアッキーからメールが来た。今どこにいらんだって聞かれたから返事を出したら、それつきりケータイは沈黙してる。返事がなかったから、私は私で一人の時間を楽しんでた。そしたら急にドアが開いたもんだから、ビックリして後ずさっちゃった。

「お前……何でこんなとこにいるんだよ」

教室に入ってきたのはアッキーで、ちょっと息を切らせながらそう言った。アッキーだってロンリータイムに入ることがあるくせに、私がそういう気分でもお構いなしなんだから。でもアッキーだったら、別にイヤじゃない。

「懐かしいなあと思って。ここで初めて、アッキーと会ったんだよねえ」

私がいじみ言つと、アッキーは眉根を寄せながらキョロキョロした。自分のこと知らないヤツがいたんだってへこんでたくせに、忘れたのかな。まあ昔のことだから、今更その話題を蒸し返さなくてもいいか。せっかくのクリスマスなんだしね。

「アッキー、メリークリスマス」

アッキーにこんなこと言うの、今日が初めて最後かもしれない。でもアッキーはきつと、毎年のようにファンの子たちに言うんだろうなあ。今年は学校のパーティーに参加してるけど、クリスマスライブとか好きそうだなね。

メリークリスマスって返すかわりに、アッキーは私の隣に並んだ。窓ガラスの向こうにある空を見てるアッキーはスーツ姿で、何だかいつもと違う。でも髪型はいつものまんまだから、やっぱりアッキーはアッキーだね。

「雪、降りそうだな」

「うん。降ればいいね」

そう言った後で、何かが引つかかった。あれ？ いつかも、アッキーとこんな話をしたような気が……。

思い出そうとしてたら、不意にアッキーの歌声が聞こえてきた。ゲリラライブで歌ってた、激しい方じゃない方の曲だ。クリスマスソングってわけじゃないんだろうけど、いいなあ。この曲を聞いていると、何だか愛されてる感じがする。ファンの女の子たちも、やっぱりそういう気分なのかな。

この曲の最後は「愛してる」っていうアッキーの科白で終わるんだけど、アッキーはそのフレーズを囁かなかった。代わりに、雪が降りそうな空を見つめながら話を始める。

「オレが歌えなくなった原因、お前だって知ってた？」

唐突に告白されたから、ビックリしちゃった。でも思い返してみれば確かに、私と目が合った途端にアッキーは歌うのをやめちゃったんだよね。それまでは気持ち良さそうに歌ってたのに、急に素に戻ったみたいな顔してた。普段の自分を知ってる人に見られるの、恥ずかしかつたのかな。そうだとしたら、悪いことしちゃったよね。

「ごめんね」

「ぜってー分かってないだろうからあやまんな」

「……どういうこと？」

謝ったのに、拒まれちゃった。意味がわかんないよ、アッキー。

「お前が好きだって言ってたんだよ」

「……えっ」

「ほら、分かってなかっただろ？」

そんな、勝ち誇ったように言われても。えーっと……もしかして今、告白された？ でも、どう反応すればいいの？

「いいから、黙って聞いてる」

「う、うん」

なんかアッキー、私の考えてることお見通しみたい。顔に出てた

のかな？ まあ、いいや。アッキーがそう言うなら黙って聞いてよ  
う。

## 第27話

「前にも言ったように、最初は意地だった。オレのこと知らねーなんて信じらんねえって思っつて、絶対にオレの良さを認めさせてやるっつて思っつてた」

うん、それは知ってる。だから後夜祭でエルズのコピーバンドやっつたんだよね？ 私がエルズを好きだって言っつたから。

「認めさせてやったのかは今もわかんねーけど、それもだんだんどうでもよくなつてきた。いや、どうでも良くはねーか。まだお前のこと泣かせてねえし」

まだそこにこだわつてたんだ？ ジャン・ジョエルのライブ、良かったもんね。だからこそ、アッキーにとつて私を泣かせることに意味があるんだろうなあ。そう簡単には泣かないけど。

「まあ、それは置いといて」  
……置いとくんだ。黙つて聞いてるつて言われてるから、言わないけど。

「トモに頼まれて遊園地に付き合うことになった時、正直めんどくせーと思つてた。でもお前を誘つて正解だった。その頃から、お前といると一人になりたい時でも気にならねーし、気楽でいいと思つてた」

ああ、いつか言つてた「空気みたい」ってやつだね。私にもそういうところがあるから、アッキーの気持ちは何となく分かるよ。お互いにそうだったから気楽だったのかもね。

「二人で遊園地に行った時はすげー楽しかった。お前絶叫系も大丈夫だし、女のくせにオバケ屋敷でもバカ騒ぎするし。媚びないっつか、男友達といるみたいな感覚でいいなつて思つた」

ああ、その感覚は分かるような気がする。私もアッキーといる時はそういうこと考えてなかつたもんね。男友達とも男の子とも違つて、アッキーはアッキーなんだよ。アッキーもそうだったんだね。

なんか、嬉しいかも。

「そう、思ってたのに、お前が急にバカなことするから……」  
「バカなこと？」

あ、黙ってるって言われてるのに喋っちゃった。でも急にそんなこと言われたら反応しちゃうよ。バカなことって何だろ？ 私、何かしたっけ？

「しただろーが、バカなこと。オレのこと上目遣いで見たりとか、拳句の果てには顔上げたまま目閉じやがって」

……ああ、あの時のことか。アッキーは照れくさそうに顔を背けてるけど、私は未だに何があつたのか知らないんだよね。唇に柔らかいものが触れたような気がしたけど、あれってやつぱり……。

「お前がキスされるのを待ってるみたいなことするから、つい、やつちまった。そんな気、全然なかつたのによ」

あー、やつぱりあれ、キスだつたんだ。でもアッキーが言つてたみたいに、それって完全な事故だね。私にもアッキーにも、そんなつもりなかつたんだから。だけどファーストキスが事故つて……：ちよつとへこむなあ。

「あの後、どうしていいのか分からなくなつた。お前には忘れろつて言つたけど、忘れられなくて。なのにお前の方はキレイさっぱり忘れてるんだもん。あ、あれは、へこんだ」

へこんだんだ。えつと、もつと気にしてた方が良かったのかな？ でもアッキーがキレイさっぱり忘れろつて言うから、私も気にしないことにしたわけで。う、うーん、よく分からないよ。

「キスしちまつたのは事故みたいなもんだつたけど、それから急にお前のこと女として意識するようになった。だからクリスマスに先約があるって聞いた時は気が気じゃなかつた」

えーつと、それって去年の話かな？ 確かアッキーがハルちゃんのお店に連れて行けつて急に言い出して、それで一緒に行つたんだよね。でもそれが、何で気が気じゃなかつたことになるんだらう。

「お前、一年の時はクリスマスにどこか泊まつたつて言つてただろ

？ あれで、オレはお前に彼氏がいると思ったんだよ。去年のクリスマスもそいつと過ごす気なら、かつさらってやるうって思ってた。だから、そいつのところに連れて行って言ったんだよ」

私が絶対に理解してないと思ったのか、アッキーはため息混じりに説明を加えてくれた。アッキー、そんなこと考えてたんだ。誤解もいいたところだよ。

「言つとくけどな、お前が期待しろとか言つのが悪いんだからな？ オレを選んでくれるのかと期待して行ってみれば、着いたのはハルさんの店だろ？ お前に彼氏がいたんじゃないじゃなくてホツとしたけど、それと同時にお前の鈍さに泣きたくなつたぜ」

うつ……そんな言われ方されたら身もフタもないよ。アッキーがそんな誤解してたの知らなかったんだから仕方ないでしょ。でも言われてみれば思い当たることが多すぎて、アッキーに悪い気がしてきた。鈍くてごめんね。

「でも、それと歌えなくなったことに何の関係があるの？」

前に私の前ではジャン・ジョエルが歌えないって言ってたことはあるけど、それとこれは違うよね？ 普段の自分を知ってる人にライブを見られるのが恥ずかしかったのって訊いてみたんだけど、それも違うんだって。あのライブのことを思い出してるのか、アッキーはちょっと苦い表情になりながら話を続けた。

「ステージに立つとスイッチが入って、ライブで歌ってる時は自分なんだけど自分じゃないような感覚になるんだよな。だからライブ中のことは、終わるとほとんど覚えてなかったりする。いつもだったらそれくらい集中してるのに、お前と目が合ったってだけで素に戻っちまった」

あ、やっぱり、そうだったんだ。私と目が合った後のアッキーはステージで歌ってる時のアッキーじゃなかったもんね。突然素に戻っちゃったもんだから、どうしていいのかわからなくなっちゃったんだ。だからあんなに、うるたえてたんだね。

「そしたら、もう歌えなくなってた。ライブをぶち壊しにしちまっ

た自分にハラが立って、その時は何で歌えなくなっちまったのかまでは考えられなかったけど、後になってお前のせいなんだって気がついた。新しい曲を作ろうと思っても歌詞が書けないんだよな。お前の顔しか浮かばないのに、どんな風にラブソングを歌ってみてもウソっぽくなる。歌えなくなるほど惚れてたなんて、知らなかったんだ」

「アツキー……」

「そうは言っても、立ち直らせてくれたのもお前なんだよな。お前はすげーカントンに今の気持ちを歌えばいいって言ってたけど、あれは衝撃的だったぜ。それまでは歌詞を書いてても、どつかでカツコつけようとしてたんだと思う。でもお前にそう言われてから、そんなことどうでもよくなった。それで、この曲が出来たんだ」

そこで一度言葉を切って、アツキーは小さく息を吸った。次にアツキーの唇から零れたのは、文化祭で歌ってた優しい曲。最後は私の目を見て、あのフレーズを囁いてくれた。

「もう、オレの気持ちは分かっただろ？ いいかげん返事、聞かせるよ」

返事？ そんなの、もう決まってるよ。

「うん。私もアツキーのこと好きだよ」

冗談で言っただけじゃなかったんだけど、私の返事を聞いたアツキーは何故か脱力した。机を支えにするようにしゃがみこんじゃったけど、何で？

「軽すぎるだろ。お前、オレが言ってること本当に分かってるか？」  
そんな、困ったように上目遣いで見られても。素直な気持ちを言葉にしたただけだったんだけどなあ。それでも伝わらないなら、どうしたらいいんだろう。少し考えた後、アツキーと視線を合わせるためにしゃがみこんだ。こうすると、アツキーが近い。いつかの、香水の匂いがするよ。

私からキスをするとアツキーはビックリしたように目を見開いた。言葉で気持ちが伝わらないなら、こうするのが一番だよな。

「それが……お前の気持ち？」

「うん。今度は事故じゃないよ？」

「は、ははっ……」

完全に座り込んで、アッキー笑い出しちゃった。せっかくいい雰  
囲気だったのに、最後の一言は余計だったかな？ でもまあ、いつ  
か。私も笑っておこう。

## 第28話

高校最後のクリスマスにアッキーと恋人同士になって、年が明けた。三学期はほとんど学校に行かないから、後はもう卒業を待つのみなんだよね。春になれば私は大学生、アッキーは前から宣言した通り音楽活動に専念するみたい。自分の願い事って特になかったから、初詣ではアッキーの夢が叶いますようにって願ってきた。恥ずかしいから、本人には言っていないけど。

「なあ、何でライブに来なかつたんだよ」

アッキーはさっきから同じ質問をくりかえしてる。答えたくないから黙ってるのに、うるさいなあ、もう。

クリスマスにライブをやらなかつた代わりに、クラッカージャックはジュライボックスで年越しライブをやった。去年のクリスマスライブがあんな形で終わったからファン離れが心配だったみたいだけど、クラッカージャックの復活を待ってたファンに温かく迎えられてライブは盛況だったみたい。私は行ってないから、実際にどんな感じだったのかは知らないんだけど。

アッキーの歌は好きんだけど、ライブにはあんまり行きたくないんだよね。ファンの女の子にキョーキョー言われるアッキーを見ると複雑な気分になるし、ライブ中のアッキーは私だけのアッキーじゃない。前以上にそれが、何だか寂しくて。だけどアッキーの夢が叶えばいいって思ってるのも本当なんだよね。だから余計、複雑。「何でそんな寂しそうな顔してるわけ？」

うっ。アッキー、絶対私がライブに行きたくない理由分かってるよ。だって顔がニヤけてるもん。それなのに、私の口からその理由を言わせたいの？

「アッキーのバカ」

むくれて顔を背けたら、香水の匂いに包まれた。背中にアッキーの体温を感じる。冬なのに頬に触れてるアッキーの手、熱い。

「そんなにオレのこと想ってくれてんの？ マチはカワイイなあ」  
耳元で名前を囁かれるとクラクラする。こういう時のアッキーの  
声、普段喋ってる感じとも歌ってる時とも違うんだよね。それを知  
ってるのは、私だけ。アッキーの香りに包まれるのも、私だけ。そ  
うじゃなかったら、怒る。

「もうガマンしなくてもいいんだよな？」

「ガマン？ 何を？」

アッキーの腕が緩んだから振り返ったら、ガツカリした顔された。  
私、何か変なこと言ったかな？ というか、変なこと言ってるのは  
アッキーの方が。

「言わなきゃ分からないかな、フツウ」

そんな風にぼやいてるけど、言いたいことがあるなら言えばいい  
のに。話、聞くよ？

「お前がカワイイからキスしたい」

話聞くよって言ったらアッキー、ホントに言ったよ。そ、そうい  
うことね。うーん、でも、ここ家の近所なんだよね。まだ明るいし、  
キスは、ちよつとなあ……。

「そんな顔、すんなって」

返事に困っているとアッキーは私から離れて小さく頭を振った。ご  
めんね、アッキー。やっぱりここでは恥ずかしいよ。でも二人つき  
りで人目がなければ、いい。

「あ、そうだ、うち来る？ 今はみんな出かけてるから誰もいない  
し」

「……お前、ぜってー分かってなさそうだからやめとく。つーか、  
誘うなつての」

前も言っただろって、アッキーは言う。そういえば、そんなこと  
言われたこともあったっけ。でもアッキー、イヤそうじゃないよ？  
何を分かってないんだか分からないけど、来たいなら来ればいい  
のに。

「あ、じゃあ、アッキーの部屋に行きたい。またギター、聞かせて

よ

「やっぱり分かってないな。そっちの方がもつとヤバイだろうが！」  
怒鳴られた。ムズカシイんだから、もう。右を見ても左を見ても誰もいなかったから、いいや、ここで触れちゃえ。

背伸びしてキスしたら、抱きしめられた。アッキーが優しく包みこんでくれるから、そのまま胸に寄りかかる。ガタイがいいって感じではないんだけど鍛えてるから、アッキーの体って意外とたくましいんだよね。誰かに見られたら恥ずかしいけど、いつまでもこうしてたいな。

「そのまま聞けよ」

「うん？」

「だから、顔上げんなっての」

反射的に顔を上げたら頭を引き寄せられた。額がアッキーの胸に当たって、これじゃ顔が見えないよ。頭の上からアッキーの音が降ってくる。

「お前の部屋に行きたくないって言うてるわけでも、オレの部屋に連れてくのがイヤだって言うてるわけでもねーからな。ただ、お前が分かってない状態でそういうことになるのも、どうかと思ってるさ」  
歯切れが悪い感じで、アッキーはごによごによ何か言ってる。今ならもういいんだろうけどとか言ってるけど、何がいいんだろ？

主語がないから分からないよ、アッキー。

「とにかく！ オレはお前を大事にしたいんだ。だからあんま、カントンに誘ったりするなよな？」

結局何が言いたかったのかはよく分からなかったけど、アッキーが大事にしたいって言うてくれてすごく嬉しかったから頷いておいた。大好きだよ、アッキー！。私もアッキーのこと、ずっとずっと大事にするね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3250f/>

---

for a girl

2011年1月31日00時55分発行